

栃尾地区ブランディング事業
～他地域との灯りコラボへの挑戦～

石川英樹ゼミナールⅢ・Ⅳ

20K041	金子	竜久（リーダー）	20K086	永野	蓮（リーダー）
20K003	浅田	篤郎	20K005	阿部	里奈
20K011	池浦	颯士郎	20K043	川崎	太暉
20K048	木伏	渉	20K050	小島	伊織
20K074	高橋	佳伸	20K075	高山	愛羅士
20K079	月橋	唯奈	20K106	山崎	音央
21K004	新井	史哉	21K042	櫻井	大和
21K043	笹川	宗汰	21K045	佐藤	穂岳
21K055	外山	泰生	21K056	中倉	力輝
21K057	長澤	龍希	21K062	長谷川	唯人
21K069	平塚	光	21K083	箕輪	諒大
21K094	若月	優真	21K099	渡部	碧惟

令和 6（2024）年 2 月

目 次

1. 今年度のゼミナール活動の概要.....	
1.1 2023 年度ゼミメンバー紹介	
1.2 今年度の基本目標と取り組みの柱.....	
1.3 地域の方々との協働関係の拡大	
1.4 取り組み体制	
1.5 今年度の活動の土台作り	
2. 「万灯流し」との協働事業について	
2.1 プロジェクト発足の経緯.....	
2.2 具体的な取り組み内容の検討.....	
2.3 トチオノアカリ協議会との連携	
2.4 事前打ち合わせのため大垣市を訪問	
2.5 「万灯流し」に向けた準備	
2.6 「万灯流し」参加中止の危機を乗り越える	
2.7 「万灯流し」参加の最終準備.....	
2.8 万灯流し当日	
2.9 トチオノアカリ本イベントでの万灯流しとの協働	
3. 糸繰り杵ランプの商品化プロジェクト	
3.1 今年度の目標～試作品最終版の作成と展示.....	
3.2 長岡技術科学大学院生の山内陸さんにご協力いただく	
3.3 制作の準備作業への取り組み.....	
3.4 最終版試作品の組立作業.....	
3.5 トチオノアカリ本イベントでの展示準備	
3.6 来年度以降の商品開発の展望.....	
4. トチオノアカリ本イベントの活性化.....	
4.1 地域の子供達達のキャンドルライトと保護者のメッセージ・シートの展示.....	
4.2 観音寺での展示.....	
4.3 ギャラリー白昼堂堂での展示準備.....	
5. フード販売事業と高大連携.....	
5.1 今年度の目標～昨年度の失敗を踏まえて	
5.2 活動の基本方針の検討～同日開催の悠久祭での出店との両立を目指す.....	
5.3 販売メニューの検討.....	
5.4 調理法の検討	
5.5 各メニューの最終準備	
5.6 トチオノアカリ本イベントでの活動	
5.7 悠久祭当日のフード販売事業.....	
5.8 フード事業全体のふりかえり	
5.9 栃尾高校との高大連携～フード事業を題材に	

6.	ランプキットの販売	
6.1	キット販売に取り組んだ経緯	
6.2	販売方法などの詰め	
6.3	キット販売の準備	
6.4	イベント当日～キット販売コーナーは大盛況	
7.	スタンプラリーの開催	
7.1	スタンプラリーのねらい	
7.2	スタンプラリーの開催要領の決定	
7.3	スタンプラリー・シートの作成、賞品抽選体制の確認	
7.4	昨年度実績を大きく超える	
8.	広報への取り組み	
8.1	広報班による今年度の活動	
8.2	大垣市で展示するトチオノアカリの PR パネルの作成	
8.3	トチオノアカリ本イベントで展示するパネル作成	
8.4	チラシの作成と配布	
8.5	Instagram 利用の活性化に向けて	
8.6	ウェブサイトによる広報	
9.	活動資金の調達と管理	
9.1	資金班によるゼミ全体の資金の調達・管理の取り組み	
9.2	資金調達～補助金獲得は失敗、自己資金の獲得へ	
9.3	多くの方々からのご支援	
9.4	資金管理の工夫	
9.5	支出削減を目指して	
9.6	資金繰り表作成による財務状況の把握	
9.7	資金面での振り返り、来年度に向けた課題	
10.	成果発表に向けて	
10.1	エンドロール作成	
10.2	成果発表会	
11.	全体の振り返りと来年度に向けた考察	
11.1	今年度の反省点	
11.2	来年度に向けて	
11.3	終わりに	

1. 今年度のゼミナール活動の概要

1.1 2023 年度ゼミメンバー紹介

2023 年度の石川ゼミナールは、4 年 12 名、3 年 12 名の計 24 名からなる。私たちが目指す栃尾地域の「活性化」は、「栃尾地区の交流人口と滞在人口の増加」である。究極的に定住人口の増加と経済規模の拡大につなげていくための土台作りである。

今年度も、栃尾地区のデザイン事務所代表の大竹幸輔様、村上市ご出身で廃材再生アーティストの加治聖哉様のお二人にアドバイザーに就任頂けた。また、昨年度に続き、長岡技術科学大学院・修士課程 2 年の山内陸様に商品開発に関する指導をしていただけたことになった。

石川ゼミでは、過去の先輩方の活動成果により既に各地域団体との広いつながりと約 300 のフォロワーを有する Instagram などのネットワークを築いてきた。私たちはその基盤のもとで、真に栃尾地区の活性化につながる結果を残していきたいと考え、一層の発展を目指して取り組みを進めることとなった。

1.2 今年度の基本目標と取り組みの柱

4 月前半から 5 月終盤にかけて、私たちはゼミ内での議論により今年度の取り組みを以下の 3 つの柱に絞った。

1. 岐阜県大垣市「万灯流し」との協働
2. 糸繰り杵ランプ（トチオノアカリ）の商品化
3. トチオノアカリ本イベントの活性化
 - (1) ギャラリーと観音寺での展示
 - (2) フード事業と栃尾高校との高大連携
 - (3) ランプキット販売、スタンプラリー

これら 3 つの柱の概要は以下の通りである。

（岐阜県大垣市「万灯流し」との協働）

岐阜県大垣市の灯りイベント「万灯流し」と「トチオノアカリ」のコラボ事業である。昨年度終盤にアドバイザーを通じて、ともに灯りのイベントである両方で連携できないかという構想が持ち上がった。その実現プロジェクトである。私たちにとって未知の挑戦だったが、①栃尾活性化をアピールするための話題作り、②栃尾の県外での PR、を目指し挑戦することにした。

（糸繰り杵ランプの商品化）

トチオノアカリ糸繰り杵ランプの商品化プロジェクトである。トチオノアカリの糸繰り杵ランプを商品化し、①地域資源の知名度向上、②トチオノアカリ協議会の新たな収益源開拓、のために昨年度開始した事業の継続である。今年度は来年度以降の量産・販売開始につなぐための試作品最終版の制作に取り組んだ。

（トチオノアカリ本イベント活性化の 3 事業）

「トチオノアカリ」とは、栃尾の伝統産業である繊維業を象徴する織機の糸繰り木杵と

栃尾産の糸で製作された LED ランプにより、夜の栃尾を優しくライトアップする幻想的なイベントである。2016 年に開始され、2 日間で過去最大延べ 2 万人の来場者があった。栃尾地区で最大の集客数をもたらす催しの一つとして、栃尾全体のブランディングで大きな鍵を握るイベントである。この「トチオノアカリ」本イベント（2023 年 9 月 16・17 日）を活性化させるべく、以下の三つに取り組んだ。

一つ目はイベント会場のナイトマルシェにおけるフード販売事業である。イベントでのフード不足解消、トチオノアカリへの来場者の満足度向上と会場滞在時間の増大、及び私たちの活動資金に充当するための収益獲得が基本目標である。

二つ目は、ギャラリー白昼堂堂（3 年前に石川ゼミが立ち上げをサポートした栃尾雁木通りの古民家再生ギャラリー）とお寺でのインスタレーション（「空間芸術」）展示事業である。

三つ目は、イベント会場での糸繰り杵ランプ簡易キットの販売とスタンプラリーの開催である。簡易キットの販売は、トチオノアカリの知名度とブランド力を向上させるのがねらいである。スタンプラリーでは、トチオノアカリでの賑わいづくり、滞留人口増加への寄与、雁木通りの魅力発信を目指した。

（執筆担当）金子 竜久

1.3 地域の方々との協働関係の拡大

石川ゼミではこれまでも多くの地域の方々と協働関係を築いてきた。今年度はさらに地域連携を拡張し、新たに 8 つの団体、約 300 名の方々との協働関係を創出できた（〔図表 1-1〕参照）。地域における数百人規模の交流人口を巻き込んでゼミ活動を進めることができたのである。

今年度については、岐阜県での新たなコラボ事業において水都祭り実行委員会や大垣市青年のつどい協議会の皆様と協働関係を築けたのに加えて、栃尾地域でも地域活動で関係を広められたことが大きな実績である。ゼミでこれまで栃尾地域に長く関わってきた中で、私たちは取り組みがマンネリ化してしまうのを避けたかった。その点で栃尾地区における協働関係の一層の深化と拡張は、私たちの地域活動の進化へ大いに寄与したと思う。

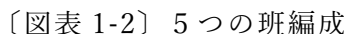
1.4 取り組み体制

今年度私たちは、4 年金子、永野 2 人のリーダーの下で、5 つの班編成で活動した（〔図表 1-2〕参照）。その特徴は、①大垣市とのコラボ事業に特化した「地域連携推進班」の新設、②各班での記録担当者配置、の 2 点である。特に②に関して、昨年度はゼミ全体で「記録班」が置かれた。ゼミ全体で効率的な情報整理がなされた反面、個々のゼミ生に自分の班以外の進捗が明確に見えず、情報共有が必ずしも十分ではなかった。その改善策である。今年度は各班の記録担当者が毎回活動を記録し、次の授業で全体に共有する体制にした。自分の班以外の進捗が把握できるようになり、活動全般でプラスとなった。

1.5 今年度の活動の土台作り

昨年度の反省点の一つに、年度当初は栃尾に行っていない 3 年生が多く、ゼミ活動

〔図表 1-1〕今年度ゼミ活動における地域とのネットワーク



以下では、本年度の活動の三本柱のそれぞれについて報告する。

〔図表 1-3〕トチオーレ 1 周年イベント～大竹アドバイザーとの交流(左)とギャラリー白昼堂を視察する 3 年生(右) (2023/4/29)



〔図表 1-4〕とち音むすびフェスにスタッフとして参加 (2023/5/21)



(執筆担当) 永野 蓮

2. 「万灯流し」との協働事業について

2.1 プロジェクト発足の経緯

今年度、私たちは石川ゼミ初の取り組みとして、岐阜県大垣市の灯りイベント「万灯流し」と「トチオノアカリ」とのコラボ事業に挑戦した。

きっかけは、昨年度終盤にアドバイザーから伺った「大垣市青年のつどい協議会」からのお誘いだった。それは、「ともに灯りのイベントであるトチオノアカリと大垣市の万灯流しの連携事業ができないか」という内容だった。

「万灯流し」とは、毎年 8 月に岐阜県大垣市で開催される「水都祭り」における市民参加のイベントである（〔図表 2-1〕〔図表 2-2〕参照）。水の恵みに感謝して水門川のほとりに万灯を並べライトアップし、市民が持ち寄った万灯が流される幻想的で美しい催しである。主催団体は大垣市青年のつどい協議会で、市民のみなさんに事前に無料の万灯制作キットを配布し、イベント当日に市民が自作のオリジナルの万灯を流すのである。今年度の「水都祭り」は 8 月 5・6 日、「万灯流し」は 8 月 5 日開催だった。

この万灯流しに「トチオノアカリ」のランプを持ち込むことで、灯りイベントをバージョンアップさせ、「トチオノアカリ」および私たちの活動の PR につなぐ構想である。県外しかも遠く離れた岐阜県での活動という、これまで考えもしなかった活動だった。

そのアイデアに対して、私たちは県外に向けて栃尾地区 PR の第一歩となる絶好のチャ

ンスではないかと考えた。さらに、栃尾地域活性化の活動を地域内においてもアピールするうえで話題づくりにつながり、何より長岡大および石川ゼミの取り組みを広域にアピールできるのではないかと考えたのである。

〔図表 2-1〕「万灯流し」ポスター



〔図表 2-2〕万灯流しの様子



(出典) 大垣観光協会ホームページ (<https://www.ogakikanko.jp/event/suitomaturi/>)

ゼミ内で議論した結果、ぜひチャレンジしようという意見で固まり、ゼミ内に4名（4年高橋、永野、3年佐藤、長谷川）からなる「地域連携推進班」を設置し、その企画立案や「万灯流し」関連の情報収集を開始した。

（執筆担当）高橋 佳伸

2.2 具体的な取り組み内容の検討

私たちは、大垣市で何ができるか案を作成し、それをもとにトチオノアカリ協議会の西片会長と相談することにした。「トチオノアカリ」と「万灯流し」との協働プロジェクトであることから、トチオノアカリ協議会との緊密な連携が重要だった。

地域連携推進班では、まず具体的な取り組みのアイデア出しを進めた。当初からトチオノアカリ協議会の糸繰り枠ランプを持ち込んで水門川沿いに並べるアイデアは出されていた。それ以外に私たちオリジナルの取り組みを提案したいと考えた。班内の議論で以下のアイデアが出た。

- ① トチオノアカリ版の万灯の作成・販売
- ② 糸繰り枠ランプを使った大型の万灯を作成し水門川に流す
- ③ 会場でのスタンプラリーの開催
- ④ 栃尾の油揚げの販売（またはスタンプラリーの景品としての活用）
- ⑤ パネル、チラシによりトチオノアカリと私たちのゼミ活動をPRする

これらが現地で実現可能なのかわからない。当面は、西片会長が大垣市青年のつどい協議会と連絡を取って下さる体制となっていた。ともかく、私たちは上記の提案を整理し、西片会長に相談することにした。大垣市からそのお返事をいただくまでは不用意に動くことができない。その間の時間の有効活用が難しく、今年度の課題となった。

2.3 トチオノアカリ協議会との連携

5月12日、私たちはトチオノアカリ協議会の西片会長を訪問し、大垣市でのコラボ事業について相談した。（〔図表 2-3〕 参照）

まず西片会長から、大垣市との協働について、私たちゼミ生がやる気であれば協議会としても頑張って進めていきたい、と心強いお言葉を頂けた。既に糸繰り杵ランプを川べりに並べる取り組みは確定しており、それ以外は全面的に私たちに任せていただけた。

その後の西片会長との相談とゼミ内での議論を経て、以下が決まった。

- ① 7月1日にゼミ生がトチオノアカリ協議会と共に大垣市を訪問し、「万灯流し」主催団体の大垣市青年のつどい協議会の方々と顔合わせ兼打ち合わせをする。
- ② 少なくとも①の出張までの間は、私たちのコラボ案を引き続きトチオノアカリ協議会を通して大垣市青年のつどい協議会へ投げかけていただく。
- ③ 9月のトチオノアカリ本イベントに大垣市青年のつどい協議会の方々が参加して下さる可能性があり、その時の「万灯流し」との協働事業はゼミで検討する。

とりわけ、①は私たちにとってコラボ事業の詳細を決める重要な機会となる。西片会長によると、これまでの大垣市側からのお返事では、私たちのアイデアに対して肯定的とのことだった。7月1日の現地での相談に向けてゼミで企画内容をまとめて、出張の際に改めて直接ご相談することにした。

（執筆担当）佐藤 穂岳

〔図表 2-3〕 トチオノアカリ協議会の西片会長と相談（2023/5/12）



2.4 事前打ち合わせのため大垣市を訪問

7月1日、石川ゼミ5名（4年木伏、高橋、3年佐藤、長谷川、ゼミ教員）、大竹アドバイザーを含むトチオノアカリ協議会5名の計10名で、岐阜県大垣市へ出張した。大垣市青年のつどい協議会の方々への挨拶、協働内容の相談、現地視察が目的である。保険の問題があるため先生の自動車での移動で、片道6時間での日帰りという弾丸ツアーだった。

早朝に大学に集合し、何度か休憩を挟みながらの長旅となった。現地大垣市では、大垣市青年のつどい協議会の田中会長、西本副会長、神村事務局長の皆様が手厚くお出迎えしてくださいました。ご挨拶の後、さっそく万灯流しの会場となる水門川にご案内いただいて、万灯を流す会場を見学できた（〔図表 2-4〕 参照）。

その後、近くの喫茶店で大垣市青年のつどい協議会の方々と、8月5日の万灯流しでの協働について打ち合わせた。私たちのアイデアを直接相談できた（〔図表 2-5〕 参照）。

打ち合わせでは、糸繰り杵ランプの万灯を流す案をはじめ、スタンプラリー、フード出店、トチオノアカリ版万灯の販売などについて、それらが可能かどうかお聞きした。田中会長は、基本的に可能だとお答え下さるとともに、各案についてアドバイスも下さった。特に、トチオノアカリ版万灯の販売について、「工夫すれば売れると思う」との心強いお言

葉もいただけた。

さらに、田中会長をはじめとする幹部の方々と LINE 交換をさせていただけた。今後は私たちと直接に逐一連絡を取らせていただけることになった。これは出張における大変大きな収穫だった。こうして事前訪問は無事終了し、私たちは当初の目的を達成できた。

〔図表 2-4〕 岐阜県大垣市の水門川視察



〔図表 2-5〕 打ち合わせ（2023/7/1）



（執筆担当）長谷川 唯人

2.5 「万灯流し」に向けた準備

2.5.1 企画を詰める

大垣市から戻り、万灯流しが約 1 か月後に迫り、地域連携推進班は取り組みの詳細を詰めた。これまで検討していた主なアイデアは、①栃尾のフード出店、②スタンプラリー開催、③パネル展示とチラシ配布での栃尾 PR、④トチオノアカリ糸繰り杵ランプの万灯を川に流す、⑤糸繰り杵ランプの販売、である。それぞれについて議論を進めた。

2.5.2 フード販売とスタンプラリー・コラボの検討

まず現地でのフード出店案について詰めた。もともとのアイデアは、ゼミ「フード班」と協力し私たちが用意したフードを水都祭りの飲食バザーの万灯流し会場付近で販売しようという案だった。出店手続は、大垣市青年のつどい協議会の西本副会長から水都祭り全体の事務局の書類を受け取り、作成する体制をとっていた。

販売メニューとしては栃尾の油揚げを考えた。栃尾を代表するフードの一つであり、地域資源の PR につながると考えたのである。栃尾地区の「まめ工房ぽっぽ」様から仕入れて、3～5 種類の商品を 1 つ 600 円程度で売ってはどうかというアイデアだった。さらに、油揚げを現地で調理し油揚げ料理として販売するという意見も出た。

最終的に、このフード出店は実施できなかった。理由の一つは、現地の保健所への申請など食品衛生法上の手続が必要になる可能性があり、8/5 までにその時間がなかったことである。また二つ目として、栃尾の油揚げ関連事業者の団体との調整の時間がなかったこともある。「とちおコミュニティーセンター」の武士俣センター長にご相談した際に、油揚げを仕入れる業者の選定では業界団体に声を掛けておくべきだとのアドバイスをいただいたが、時間がかかりそうだった。最終的に油揚げの現地販売は断念した。

大垣市現地でのスタンプラリーとのコラボも検討した。水都祭りは「万灯流し」以外にも多くのイベントを含む大きな祭りで、その中に「ゆかたで歩こうスタンプラリー」というイベントが予定されていた。ゆかたを着て全8ヶ所のチェックポイントのスタンプを集め、ゴールで賞品として名産「水まんじゅう」がもらえる催しである。このスタンプラリーの各チェックポイントで栃尾の特産品とトチオノアカリのチラシを配布し、ゴールで栃尾関連の賞品も加えてもらおうと考えたのである。

しかし、これにも現地のスタンプラリー実施団体との調整が必要で、時間が足りないと考えて断念した。下記の万灯販売とパネル展示の準備を優先して進めることにした。

なお、これらの企画に関連して、9月のトチオノアカリ本イベントに大垣市青年のつどい協議会の皆さまをご招待するときに、大垣市で有名な水まんじゅうを売ってもらっても良いのではないかというアイデアも出て検討したが、今年度は実施できなかった。

2.5.3 トチオノアカリ版万灯を流す案および販売する案の検討

続いて検討したのは、トチオノアカリ版の万灯を川に流して、大垣市民にPRする案である。トチオノアカリの糸繰り枠ランプを乗せた小舟または板を万灯として流すのである。

流す万灯の形状を検討した。オーソドックスにトチオノアカリを1つだけ乗せる案、4つのトチオノアカリを正方形に均等に並べて乗せる案など4種類を考えた。加治アドバイザーからもアドバイスをいただき、具体的に試作を進めた（〔図表 2-6〕参照）。

〔図表 2-6〕 トチオノアカリ版万灯の試作（2023/7/7）



もう一つのプロジェクトは、トチオノアカリの糸繰り枠ランプの販売である。簡易版のランプ1つを板の上に載せ万灯として流れようにして、当日会場で販売する案である。大垣市の方々にトチオノアカリの糸繰り枠ランプを手にとってもらい、しかも持ち帰り家で飾ってもらえれば、トチオノアカリPRの波及が期待できる。7月の大垣市訪問時に、大垣市青年のつどい協議会の田中会長からも売れると太鼓判を頂いたこともあって、この企画は実現したいと考えた。私たちは、1つ1,000円で30個用意し、トチオノアカリ1体と1枚の発泡スチロール製の土台をセットで販売することにした。

2.5.4 パネル展示、パンフレットによる相互のPR

さらに、私たちは大垣でのトチオノアカリをはじめ栃尾のPR、私たちゼミの取り組みのPRのために、パネルやパンフレットを現地に設置したいと考えた。また、9月のトチオノ

アカリ本イベントでは逆に万灯流しのパネルなどを展示し、大垣と栃尾がお互いの祭りをPRすることで、地域を越えた相互の広報を推進したいと考えた。

2.6 「万灯流し」参加中止の危機を乗り越える

2.6.1 大垣行きが取り止めの事態に

7月後半となり万灯流し本番が迫るなかで、私たちの大垣行きは危機に陥った。私たちの大垣までの移動手段が手配できなくなったのである。

当初から、トチオノアカリ協議会の方々との相談を通じて、8月の大垣行きにはバスをチャーターすることを考えていた。運ぶべき資材が多く、自家用車では運びきれない。それには約20万円の費用がかかることがわかっていたが、石川ゼミまたはトチオノアカリ協議会による補助金申請での負担を計画し、ゼミでは「資金班」メンバーが申請作業を進めていた。しかし、後述のとおり私たちの補助金申請はうまくいかなかった。最後の頼みの綱だったトチオノアカリ協議会による補助金申請は、採択されたものの、県外への交通費は支給されないこととなってしまった。大垣行きが翌々週に迫った7月18日のゼミ授業の時間に、トチオノアカリ協議会の西片会長からバスは手配できないとの最終判断をご連絡いただいた。

制作中のトチオノアカリ版万灯の移動はおろか、我々ゼミ生すら大垣市に行けなくなった。その後、大竹アドバイザーから、トチオノアカリ協議会の方々数名が水門川を飾る糸繰り枠ランプ等最低限の資材を1台の乗用車に積んで移動されるとのお話を伺った。

非常に残念で悔しかったが、私たちは最低限できることを考えた。とにかくパネルやチラシなど最低限の広報用資材だけでも持って行って頂けないか、トチオノアカリ協議会に相談することにした。同時に、パネル、チラシ作成以外のすべての準備作業をストップし、ゼミ出張者用に予約していた現地のホテルもキャンセルせざるを得なかった。

2.6.2 大垣市青年のつどい協議会のご支援で危機を乗り切る

大垣市青年のつどい協議会の方々にはそれまで現地出店手続きなどをサポート頂いていたことから、その取り止めを報告する必要があった。地域連携推進班リーダーの4年高橋が直接連絡を取り、ゼミ生の参加を急きょ取りやめざるを得なくなった事情の報告とお詫び、これまでの支援に対するお礼を述べた。無念さおよび悔しさの思いもお伝えした。その連絡に対して、大垣市青年のつどい協議会の西本副会長はバスチャーターの費用はどれだけなのか聞かれた。20万円程度であることをお答えして、とにかく報告を終えた。

その数日後、私たちはトチオノアカリ協議会の西片会長からの一報に驚くことになった。大垣市青年のつどい協議会の方々がバス代を負担したいと、トチオノアカリ協議会に申し出て下さったというのである。私たちからの報告を受けて青年のつどい協議会が検討されて、バス代支援を決定されたとお話を、後日伺った。

その後、西片会長がバスを借りることを決定され、そのご連絡をいただいたことで、出張までの残されたわずかな時間で、私たちは現地での最終的な取り組みを再考し準備作業を進めることになった。

(執筆担当) 高橋 佳伸

2.7 「万灯流し」参加の最終準備

2.7.1 コラボ内容の最終的な確定

参加中止を巡る騒動を経て、万灯流し参加まで残り十日間程度となっていた。そうした中で、あらためて確定した私たちのコラボの取り組みは以下の3点である。

- ① トチオノアカリの簡易糸繰り枠ランプの万灯の販売
- ② パネル展示によるトチオノアカリと私たちの活動の PR
- ③ トチオノアカリ糸繰り枠ランプ 300 個展示のサポート

試作に取り組むなど事前に作業を進めていたトチオノアカリ版万灯を川に流す案は、時間的な余裕がないことから断念した。悔しかったが、来年度ぜひリベンジしたいと思う。

2.7.2 簡易糸繰り枠ランプの万灯準備

簡易版糸繰り枠ランプの万灯は、1つ 1,000 円で 30 個用意することを既に決めており、その方針を再確認し製作作業に取りかかった。まずランプを載せた試作品を実際に水に浮かべてテストしたが不安定だったため、台座の発泡スチロールを二枚重ねにした。材料の A4 サイズ発泡スチロール板は 30 枚しか購入しておらず、不足することとなった。追加で購入して販売個数 30 個を維持しようとしたが、追加発注の納品が間に合わない可能性があったことから諦めて、販売個数は 15 個にせざるを得なかった。

〔図表 2-7〕 販売用万灯の土台作り
(2023/7/21)



〔図表 2-8〕 糸巻きが完成した木枠



制作の素材として、西片会長が木枠、糸、キャンドルライトを提供下さった。それらを用いて、私たちはお借りした糸巻き器で糸巻き作業を行い完成した。台座は、加治アドバイザーの助言から黒い画用紙と黒テープで黒色に統一し、糸繰り枠ランプが綺麗に映えるように工夫した。そうして、糸巻きが完了した糸繰り枠ランプを黒い台座に両面テープで固定し、販売用のトチオノアカリ版万灯 15 体が完成した。

一方で、これらの販売にあたり、現地での出店申請書を青年のつどい協議会の西本副会長を通して提出した。これにより、青年のつどい協議会の方々から私たち専用ブースの設置とテント・机・椅子等をお借りできることになった。

2.7.3 展示パネルとランプ解説書の準備

トチオノアカリと私たちの活動の PR パネル展示にむけて、ゼミ広報班と地域連携推進班とが協力してパネルを作成した。私たちのテントで展示するためである。パネルは以下

の3枚として、広報班メンバーにより作成した（〔図表 2-9〕 参照）。

- ①販売するトチオノアカリ版万灯の紹介パネル
- ②長岡大学及び石川ゼミの活動の紹介パネル
- ③トチオノアカリの紹介パネル

また、販売する簡易糸繰り枠ランプの万灯について、購入者にお渡しする解説書を作成した。そこでは「トチオノアカリ」について、また私たちのゼミ活動について、最低限の解説を記載した。大垣の方々に、少しでも私たちの地域活性化の活動を PR したいと考えた（〔図表 2-10〕 参照）。

〔図表 2-9〕 広報班がパネル制作（2023/7/29）



〔図表 2-10〕 糸繰り枠ランプ万灯の解説書

ご購入ありがとうございます!!

万灯流しで流せるトチオノアカリ・ランプをご用意致しました。これは新潟県長岡市榑尾地区の地域資源で作られたランプです。

榑尾は織機のまちです。かつて活躍した織機の一部である糸繰りの木枠と榑尾産の糸で製作されています。木枠と糸はトチオノアカリ協議会様より提供いただきました。流していただいた後も、ランプをインテリア用などとしてお楽しみください。

(注) 中のLEDキャンドルライトはCR2032電池内蔵です。電池が切れた場合、電池交換可能です。

トチオノアカリとは？


トチオノアカリは、新潟県長岡市の中山間地域「榑尾地区」のライトアップイベントです（今年は2023/9/16・17開催）。主催団体はトチオノアカリ協議会様です。「榑尾のまちを明るくしたい」という地元中学生の思いから始まりました。織物のまち「榑尾」を象徴する糸繰り木枠のランプが、夜の榑尾のまちを優しく照らします。

長岡大学（新潟県長岡市）石川ゼミナールⅢ・Ⅳのご紹介


私たちは榑尾地区の活性化に向けて、地域ブランディングに取り組んでいます。その一環として、2023年度は水門川万灯流しとトチオノアカリとの灯りイベントのコラボレーションに挑戦しようとして新潟県から参加いたしました。

新潟県長岡市御山町80-8 長岡大学 石川ゼミナールⅢ・Ⅳ
(担当) 4年 高橋佳伸、(指導教員) 石川英樹
(ご連絡先) TEL. 0258-39-1907 (石川研究室)、email tochiomoriagetai2022@gmail.com

私たちの活動を伝える Instagram です。
フォローをお願いします! ⇒⇒⇒⇒



TOCHIO_MORIAGETAI



長岡大学
NAGAOKA UNIVERSITY

2.8 万灯流し当日

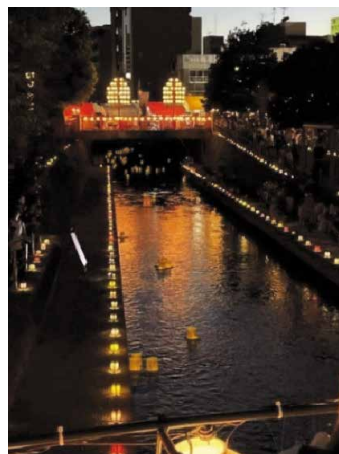
2.8.1 大垣への移動と会場での準備

いよいよ水都祭り・万灯流しの8月5日を迎えた。大学では前期末試験週間のまただ中だったが、4年高橋、3年笹川、佐藤、長谷川、箕輪の計5名がゼミ代表で出張した。青年のつどい協議会によるご支援で手配が可能となった貸し切りバスにより、トチオノアカリ協議会5名の方々とともに大垣市に向かった。片道6時間の行程で、早朝出発しお昼過ぎに現地に到着した。青年のつどい協議会の方々と合流までに少し時間があつたため、先にホテルのチェックインを済ませ喫茶店で段取りなどを打ち合わせることにした。

〔図表 2-11〕ゼミのブースを設営
(2023/8/5)



〔図表 2-12〕水門川を照らすランプ



その後、青年のつどい協議会の方々と無事合流し、1時間ほどかけて万灯流しの会場となる水門川の川べりの指定場所に私たちの専用ブースのテント組立、パネル展示、ランプ万灯販売の準備などの設営をおこなった（〔図表 2-11〕参照）。テントや机類をお借りして販売ブースも確保できた。そのうち夕方になり、万灯流しの会場近くの大通りが歩行者天国となり、多くの屋台が並び、たくさんの人で溢れかえってきた。私たちは、青年のつどい協議会の方々に協力頂いて、用意していたトチオノアカリ版万灯販売のチラシ配りもおこなった。

〔図表 2-13〕万灯流し前の記念撮影



〔図表 2-14〕ランプ万灯の販売



なお、水門川沿いをトチオノアカリ糸繰り枠ランプで飾る作業については、西片会長をはじめアカリ協議会の方々が担当されることになった。暗くなった頃には、飾られたランプが水路を優しく照らし、幻想的な光景が創出された。多くの祭り来場者が足を止めて写真撮影をされていた（〔図表 2-12〕参照）。

2.8.2 万頭流しの開始

夕方になり、万灯流し参加者の行列ができはじめる時間となった。私たちは、テントでのランプ版万灯販売担当3名、川下で流れてくる万灯を引き上げるお手伝い担当2名、の二手に分かれて活動した。

ランプ版万灯は持ち込んだ15個全ての販売を目指した。各自の万灯を抱えて流す順番待ちの人々が私たちのテント前で行列になっていたことから、その人達に向けて購入を呼

びかけた。青年のつどい協議会のスタッフの方も協力下さり、私たちが新潟県から駆けつけたことも含めて呼びかけて下さった。その甲斐あって、6個をお買い求めいただけた（〔図表 2-14〕参照）。完売ではないが、トチノアカリのランプに初めて接する大垣市の方々への販売実績は、栃尾の域外 PR の第一歩として大きな足跡になったと思う。

他方、万灯流し回収のお手伝い担当 2 名の任務は、川上から流れてくる万灯を回収し、流した人にお返しする作業だった。川に入る必要があり、水深があって予想以上に厳しい作業だったが、青年のつどい協議会の方々や万灯を流した市民とのふれあいで、大いにやりがいを感じられた。

祭り終了後は会場の撤収作業を協力して行い、ホテルに戻ったのは深夜 12 時近くとなった。翌日の帰還は早朝の出発だったが、出発前のバス内で、大垣市青年のつどい協議会の田中会長がお礼のご挨拶をして下さった。こうして、万灯流しでのコラボ事業は大きなトラブルもなく無事終えることができた。

ただ、15 個のランプを完売できなかったことは課題として残った。チラシ配布やテントでの呼びかけ等の積極的な PR が不十分だったこと、ランプの糸が白一色で製品に魅力向上の余地があったことなどが要因として考えられる。この反省を生かし、来年度以降は改善に努めていきたい。

（執筆担当）長谷川 唯人

2.9 トチノアカリ本イベントでの万灯流しとの協働

2.9.1 トチノアカリ本イベントでの万灯流し関連の取り組みを検討

大垣から万灯流しとトチノアカリとのコラボイベントを無事終えて戻ってきた私たちの次の課題は、9 月 16・17 日のトチノアカリの本イベントにおけるコラボ事業だった。私たちは既に、トチノアカリ協議会の西片会長から青年のつどい協議会の方々がトチノアカリ本イベントへ見学に来て下さることを伺っていた。残り 1 か月半となり夏休みを満喫する間もなく、内容の検討と準備に取り掛かった。

ゼミ内での議論では、大垣から万灯を栃尾に持ってきていただいて栃尾中心部を流れる刈谷田川などで流せないかという案も出た。しかし、西片会長との相談で、それは不可能だということがわかった。刈谷田川は信濃川水系の一次支川で一級河川指定を受けている。そのため国土交通省から許可が下りない。過去にも河川を活用したイベントをトチノアカリ協議会で企画したことがあったが、まったく許可されなかったとのことだった。そうしてゼミで相談を続けた結果、最終的に決まったのは以下の 2 つである。

①万灯流しのイベントの様子を撮影した動画をプロジェクターによりギャラリー白昼堂の壁に投影する

②万灯流しを紹介するパネルを作成し白昼堂で展示する

ギャラリー白昼堂ではゼミでインスタレーション展などのイベントを計画していたことから、上記 2 つの展示により来場者に万灯流しをアピールしたいと考えた。

（執筆担当）佐藤 穂岳

2.9.2 万灯流し紹介の準備

私たちは、さっそく万灯流しの映像投影の準備と紹介パネルの作成に取り掛かった。

パネルは、万灯流しについての簡単な解説と8月5日の万灯流しの会場でのコラボ事業に関する概要を伝える内容とした。地域連携推進班と広報班が各1枚ずつパネルを制作した。

動画投影では、万灯流しを全く知らない人に向けて、万灯流しの雰囲気や概要を分かりやすく伝えることを考えた。大学の教務課からパソコンをお借りし、プロジェクターとケーブルはゼミ研究室のものを使用できた。投影する動画については8月5日の大垣訪問時にゼミ生が撮影した映像もあったが、見やすさを考慮して青年のつどい協議会が公式サイトで公開されている紹介動画を活用することにした。

9月の本イベント直前のギャラリー白昼堂での準備作業で、2枚のパネル展示は問題なかったが、動画投影の準備に支障が生じた。もともとギャラリー内では、PCとプロジェクターを台に置いて壁に投影することを予定していた。しかし、本イベント前日にギャラリー内のインスタレーションの準備を進める中で、天井から吊した大型のトチオノアカリ糸繰りランプが投影に重なり、上手く映し出せなかったのである。そこで急きょ加治アドバイザーにサポートいただき、ギャラリー天井付近に台を新設してPCとプロジェクターの両方を格納することにより、無事準備が完了できた（〔図表 2-15〕参照）。

〔図表 2-15〕 白昼堂で万灯流しパネルの展示（左）と壁への動画投影（右）



2.9.3 大垣市青年のつどい協議会の皆様を栃尾でお迎え

9月16日にトチオノアカリ本イベントの初日を迎え、同日に大垣市青年のつどい協議会の田中会長、西本副会長、神村事務局長が栃尾を訪問して下さった。あらかじめ集合場所・時間をお伝えしていたのでスムーズにお会いでき、白昼堂までご案内して、私たちが準備したパネル展示と動画投影をご覧いただけた。

田中会長からは「とても素敵な活動をされている」とお褒めの言葉も頂けた。外では、私たちゼミの屋台や観音寺のキャンドルライト展示も楽しんでくださり、帰り際にはギャラリー内で集合写真も撮っていただけた（〔図表 2-16〕参照）。

〔図表 2-16〕 ギャラリー白昼堂で大垣市青年のつどい協議会の方々と一緒に
(2023/9/16)



今年度のトチオノアカリと万灯流しのコラボ事業では、大垣市と栃尾地区の双方の灯りイベントで協働を実現できた。こうして新たに築けた交流を、来年度も一層深めていきたい。今年度は初年度だったこともあり、いくつか課題が残った。それらの反省点の改善を進め、地域を越えた地域活性化事業をさらに充実させていきたい。

(執筆担当) 高橋 佳伸

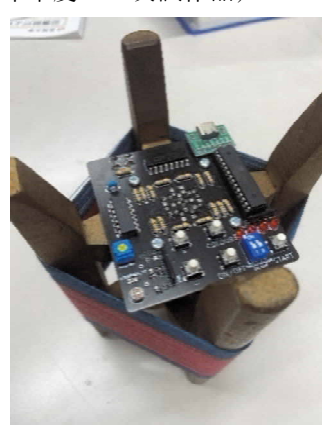
3. 糸繰り杵ランプの商品化プロジェクト

3.1 今年度の目標～試作品最終版の作成と展示

今年度の石川ゼミ全体の取り組みの二つ目の柱は、糸繰り杵ランプの商品化プロジェクトである。ランプの商品化・販売を通じて、知名度向上とともにトチオノアカリ協議会の新たな収益源を開拓しようという昨年度事業の継続である。

〔図表 3-1〕 糸繰り杵ランプの新旧ラインナップ

(左：非売品の既存ランプ、中央：昨年度の一次試作品、右：昨年度の二次試作品)



今年度は、試作品最終版を作成し、9月16・17日のトチオノアカリ本イベントで展示することを目標とした。その大枠の方向性について、4月18日の第二回目のゼミ授業で確認し、このプロジェクトは「イベント班」の4年木伏、山崎、3年新井、若月とリーダー金子の5名が担当することにした。

昨年度は、非売品である既存のランプをもとに、外部の電力供給（type-CのUSBコネクタ）に変更し明るさ調節機能を付けた一次試作品をまず製作した。次いで、その製品に対するアンケート調査を実施し、結果を踏まえタイマーや各種切り替え機能を追加した二次試作品を製作した（〔図表3-1〕を参照）。今年度は、市販化を一層意識して、二次試作品をさらに改善し、最終版の試作品の完成を目指した。

3.2 長岡技術科学大学院生の山内陸さんにご協力いただく

私たちは、昨年度の試作品製作でご協力下さった長岡技術科学大学院生の山内陸さんに、今年度もご指導をご依頼した。山内さんは快諾くださり、さっそく6月6日の授業に来学いただくことができた。イベント班のメンバーは、山内さんからアドバイスを頂きながら打合せを進めた。主に以下の2点が話題になった。

- ①最終版試作品の機能と基盤設計をどのようなものにするか
- ②今年度の成果をもとに、次年度以降の商品化をどう進めるか

①の機能に関して、当初は電源スイッチ、USBコネクタ、明るさ調整（調整ツマミ）、タイマー（5分・30分）が必要だろうという意見が出た。しかし山内さんから、機能を欲張らずシンプルで良いとアドバイスを頂いた。その結果、タイマーは無しにする代わりにランプの色の切り替え機能を付すことにした。

②は大きな問題だった。目標どおり今年度に最終版試作品を製作したとして、来年度以降は、実際に量産を委託する企業探しが問題となる。今年度大学院を修了される山内さんに指導いただけるのは、今年度が最後だ。来年度以降の協力企業探しなどでの交渉は我々ゼミ生だけで挑戦することになる。その点も見据えて今年度の活動を進める必要がある。

その準備として、山内さんに年度中に3年生に対して回路などについて最低限の基礎知識をご指導いただく機会を設定いただけないかお願いすることにした（12月12日に開催。後述）。

3.3 制作の準備作業への取り組み

私たちは、9月16日のトチオノアカリ本イベントでの展示に間に合うように試作品を完成させねばならなかった。それまでのスケジュール、段取りを検討した後、まずは以下の2つの準備作業に取り組むことにした。

- ①作業や取り付けに必要な部品などの購入：

8月17日、山内さんのご指導の下で、組み立てに必要なプラ板、ビス、電動ドリルなどの物品の買い物リストをまとめた。それに従って、イベント班のメンバーで手分けをして、ホームセンターやネット通販で買い揃えた。部品の材質など、確認すべき状況では山内さんと直接連絡を取りながら購入した。

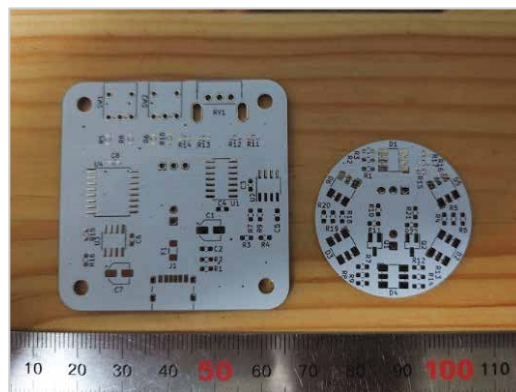
②糸繰り枠の計測：

トチオノアカリの糸繰りの木枠（34 個）の寸法を測った。基盤および基盤を取り付ける台のサイズを決定する上で正確な数値を把握するためである。糸繰りの木枠は一つ一つのサイズが微妙に異なり、ある程度のサンプルでサイズを測って平均値を求める必要があった（計測の様子は〔図表 3-2〕を参照）。

〔図表 3-2〕 糸繰り枠の計測作業（2023/7/19）



〔図表 3-3〕 最終版試作品の基盤



上記の 2 つの作業と平行して基盤の基本設計を検討した。明るさ調節のツマミを付し、昨年度同様に外部電力で type-C の USB コネクタを内蔵させ、さらにランプの色の切り替え部品を含む仕様に最終決定した。

それらを反映した具体的な基盤の設計は、山内さんが請け負ってくださった。その後 9 月 4 日に、完成した最終版試作品用の基盤を大学に持ってきてくださった。山内さんによると、基盤の製作は海外専門業者に設計図を指示して生産委託し完成して下さったとのことだった（完成した基盤は〔図表 3-3〕を参照）。

3.4 最終版試作品の組立作業

この時点ですでにチオノアカリ本イベントまで 2 週間を切っていたことから、イベント班に他のゼミメンバーも加わって、最終版試作品の組立完成作業に取り組んだ。

〔図表 3-4〕 最終の組立作業（2023/9/4）



イベント班のメンバーを中心に、①はんだ付け作業担当者、②基盤を糸繰り枠に設置する担当者、③糸を巻き付けて仕上げる担当者、の 3 つに分かれ作業を進めた。難関ははん

だ付け作業だった。昨年度の二次試作品よりも基盤がコンパクトな設計のため、その分はんだ付けでは繊細で慎重な作業が必要だった。なかなかうまくいかず、時間が掛かってしまった（〔図表 3-4〕を参照）。他方で、糸巻きに関しては昨年度経験済みだったことからスムーズに進んだ。こうして、最終版試作品の糸繰り枠ランプを 5 個完成できた。

（執筆担当）金子 竜久

3.5 トチオノアカリ本イベントでの展示準備

完成した 5 体の試作品は 9 月 16・17 日のトチオノアカリ本イベントにおいて、ギャラリー白昼堂でインスタレーションの一部として展示した。うち 1 体はギャラリー受付に配置した。試作品 4 体の傍には広報班が制作した説明パネルも展示し、来場者に興味を持っていただけるよう工夫した。

〔図表 3-5〕説明のパネルとともに展示した試作品（2023/9/16）

当日は、多くの来場者に試作品をご覧いただけた。何名かの来場者からは、ランプの色の切り替えや明るさ調整の新たな機能に対してお褒めの言葉もいただけた。市販化を目指していることを伝えた際に、購入したいと仰った来場者も 2 名おられた。どちらも栃尾の方で、商品化の活動をととても前向きに応援してくださった。



（執筆担当）永野 蓮

3.6 来年度以降の商品開発の展望

来年度以降は、今年度の成果である最終版試作品をもとに量産を目指すことになる。そのためには、①協力企業探し、②量産のための最終版プロトタイプ的设计図の作成、という 2 つの大きな課題がある。

①については、今後、トチオノアカリ協議会の西片会長にも相談する必要があるであろう。②については、来年度以降は山内さんにご指導いただけないことから、現 3 年生を中心にゼミ生のみで取り組まざるを得ない。大変な課題ではあるが、ゼミ生全体の力を合わせて乗り越えて欲しい。

（執筆担当）金子 竜久

4. トチオノアカリ本イベントの活性化

4.1 地域の子どものためのキャンドルライトと保護者のメッセージ・シートの展示

4.1.1 西片会長を通じた PTA との連携

今年度の活動の三つ目の柱は、トチオノアカリ本イベント活性化事業である。(1) ギャラリー白昼堂と観音寺でのインスタレーション（空間芸術）展、(2) フード事業と栃尾高校との高大連携、(3) ランプキット販売とスタンプラリー、の三つからなる。

その一つ目の (1) ギャラリーと観音寺での展示は、トチオノアカリ協議会の西片会長との相談で決定された取り組みである。5 月中旬、西片会長との打合せの中で、栃尾地区の

幼稚園・保育園・小中学校と連携した展示事業を提案いただいた。西片会長は栃尾地区の小中学校の PTA と連携しておられ、PTA に呼びかけて各学校に創作を依頼し、その完成品を私たちが展示し、終了後に各学校へ返却するという流れである。

西片会長からいただいた具体的な展示の提案は以下の 2 つだった。

- (1)子どもたちにメッセージ付きキャンドルライトを製作してもらい、展示する
- (2)保護者に子どもたちへのメッセージをシートに書いてもらい、展示する

ゼミで相談した結果、その両方をトチオノアカリ本イベントで実現したいと考えた。インスタレーションとして展示を工夫することで、本イベントの魅力を高めることができる。さらに、地域の子どもたちや保護者の皆様の交流活性化につながると考えたのである。そうしてここに、栃尾地区の子ども達と保護者の皆様の作品計 1,400 点の展示プロジェクトが立ち上がった。

ゼミ内の分担として、このプロジェクトは「イベント班」の 4 名が企画と調整を担当することになった。後述の通り、展示会場は白昼堂堂と観音寺の 2 カ所となり、イベント班の中で、両会場の担当 2 チームを編成した。

4.1.2 基本的な事業企画

私たちはさっそく取り組みの詳細とスケジューリングなどを相談した。キャンドルライトとメッセージの完成品は、ともに夏休みの前に受け取ることが確認できていた。具体的な会場での展示作業を、夏休みにまとめて作業できそうだった。

展示企画としては、キャンドルライトのみを展示した昨年度とは異なり、メッセージ・シートが加わった。作品数が多くギャラリー白昼堂堂のみでは収まらない。西片会長とも相談した結果、すぐ近くの観音寺もお借りすることにした。観音寺は西片会長の恩師の星野様が管理されており、無償で提供頂けた。ゼミで検討した結果、ギャラリー白昼堂堂でメッセージ・シートを展示し、観音寺でキャンドルライトを展示することに決めた、

具体的な会場内での展示方法としては、とりわけ初体験となるメッセージ・シートが難題になりそうだった。そのヒントとして、西片会長から過去の展示実績では大型の糸繰りランプの四面に貼り付けたことがあるとのアイデアを頂いていた。とはいえ、私たちの自由な発想で考えてもらうのが面白いと一任して下さっていた。私たちは加治アドバイザーと相談をしながらアイデアを詰めていくことにした。

なお、昨年度の経験から、展示にはある程度の費用がかかることが見込まれた。その点について、2 会場での展示となる点を考慮いただいて、それぞれ 2 万円、合計 4 万円をトチオノアカリ協議会からご支援いただけることになった。

(執筆担当) 若月 優真

4.2 観音寺での展示

4.2.1 本堂内でのレイアウトの決定

観音寺で飾る子どもたちのキャンドルライトは約 800 個になるとのことだった。そのレイアウトをどうするか、それが大きな問題だった。観音寺の敷地をお借りすることにはなったが、建物の構造が分からない。そこで、7 月にまず観音寺を訪問して本堂などの広さ

を測ってレイアウトの全体像をイメージすることにした（〔図表 4-1〕 参照）。

〔図表 4-1〕 観音寺の視察（2023/7/12）

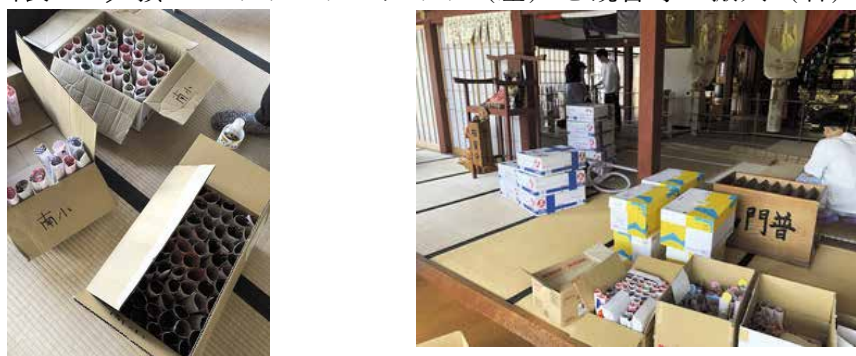


現地視察の結果、展示会場のイメージができ、レイアウトの検討に入った。話し合いでは、観音寺でキャンドルライトだけでなくメッセージ・シートも展示する案が出た。しかし、加治アドバイザーから「メッセージ要素はひとつにした方が良い」とご指導頂いた。イベント班で話し合った結果、複数の要素を取り入れると見学しにくいと判断して、観音寺ではキャンドルライトのみを飾ることを確認した。

レイアウト方法については様々な意見が出た。お寺の外の道に飾る案、ウエディングケーキのような土台を作る案などである。そうした中でも、昨年度の失敗の経験から、創作物をお預かりした学校ごとにまとめて展示することは意識した。

活用可能な資金、イベント当日の悪天候の可能性などを考慮して検討を続けた。最終的には、外はやめて本堂内に棚を活用して飾ること、また学校ごとに棚でエリアを分けてどの学校の創作物かわかりやすいような配置を考えることにした。棚を購入する資金はないことから、アドバイザーに紹介頂いた栃尾地区の葬儀会社である三大商事様に棚をお借りできることになった。事前に棚の長さを測り、具体的な棚の設置も詰めた。8月に入ると、学校ごとに収められたキャンドルライトが入った箱を受け取り、準備を進めた。

〔図表 4-2〕 預ったキャンドルライト（左）を観音寺に搬入（右）



4.2.2 キャンドルライト展示の作業

9月、トチオノアカリ本イベントが近づき、私たちは準備作業を急いだ。キャンドルライトは学校ごとに分けた配置に細心の注意を払った。昨年度「自分の子どもの作品が見つけづらい」というお声を多数頂いたためだ。とりわけ、紛失や複数の学校の混入は絶対に避けねばならない。お預かりした学校ごとの箱を事前に棚の前に置くこと、また見やすくするために棚の向き・角度を調節しながら作業を確認した。

今年度は学校ごとに棚を独立させ、各棚に学校名のラベルを付けて見やすくなるよう工夫した。また棚が少し揺れやすいため、キャンドルを置く際に倒れないように丁寧な配置を心掛けた。念のために、棚ひとつに対して担当1人が対応することにした。

〔図表 4-3〕 観音寺での準備作業 (2023/9/15)



イベント前日の9月15日、いよいよ観音寺での展示作業を開始した。イベント班の観音寺担当を中心として、他のゼミメンバーも加わり作業を進めた。イベント班から全員に作業時の注意点を伝え、来場者に満足頂けるような展示になるように丁寧な作業を心掛けた。作業日程は翌日9月16日の午前中まで見込んでいたが、15日夕方前には800個すべての展示作業が完了し、予定より早く終わることができた。

作業中には課題も生じた、準備前の計画では必要な棚の数を25組程度と見通していたが、実際に作業を進める中で棚が不足してしまったのである。急ぎょ三大商事様の倉庫に出向き、追加でお借りできた。最終的には50組程度の棚が必要となった。事前の準備の甘さが露呈したと感じる。

(執筆担当) 新井 史哉

4.2.3 観音寺で過去最大の来場者数を達成

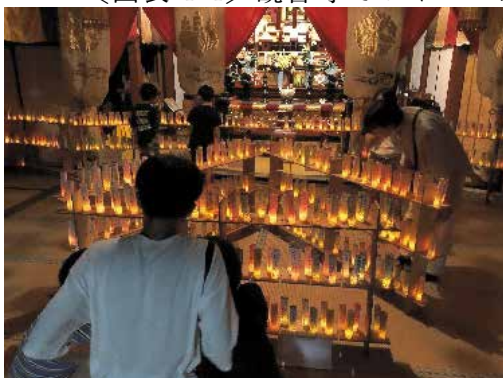
9月16日夕方、いよいよトチオノアカリ本イベントが始まった。観音寺はメイン会場の谷内(やち)通りから少し奥まった場所にある。しかも夜のイベントで外は暗く、展示イベントそのものが目立ちにくいことが心配された。その対策として、隣接する人通りが多いフードマルシェ付近に、ハンドライトの光を当てたポスターを設置した。さらに、スタンプラリーを担当した広報班と連携して、ラリーのチェックポイントの一つを観音寺に配置してもらって、導線作りを試みた。開場後は、カウンターによる来場者数の記録、さらに会場案内を担当するスタッフ2名を配置して、1時間交代でシフトを組んだ。

17時~21時で2日間の展示だったが、1日目895人、2日目741人、合計1,636人と予想以上に大勢の方に来場いただけた。観音寺をお貸し下さった星野様から「他大学の学生やその他の人もお寺で展示したことがあるが、こんなに人が来たのは初めてだよ。ありがとう」というありがたいお言葉を頂けた。

イベント終了後の片付けは、ゼミ全体で作業を進めた。キャンドルライトを学校別の箱に混入しないように注意した。後日、トチオノアカリ協議会の方を通じて、各学校に無事お返しできた。その点について、トチオノアカリ協議会の田中副会長から、「本当に丁寧に

仕事をして下さった。我々ではとてもできなかったことだ」と、ねぎらいのお言葉を頂けた。昨年度の失敗経験も活かすことができ、大成功だったと思う。

〔図表 4-4〕 観音寺でのインスタレーション展開始 (2023/9/16)



4.3 ギャラリー白昼堂堂での展示準備

4.3.1 メッセージ・シート展示のための3つの課題

もう一つの展示プロジェクトは、保護者の皆様が創作された子どもたちへのメッセージ・シートの展示である。トチオノアカリ協議会の西片会長が各 PTA と相談された結果決まったメッセージのテーマは、「照れるけど伝えたい愛言葉」だった。お預かりするシートの枚数は約 600 枚になるとのことだった。

5月中旬、私たちはさっそく企画の検討に着手した。以下の3点が問題となった。

- ① どうすれば 600 枚の全メッセージ・シートが展示できるか
- ② 薄いメッセージのフィルムを展示できるようにどう補強するか
- ③ 去年の反省点の改善として、各来場者が自身の作品を探しやすい展示法

4.3.2 展示方法の検討

特に上記①が難題だった。西片会長からは、大勢が自分の書いたメッセージを探しに来場されるという情報をいただき、白昼堂堂の限られたスペースに 600 枚のメッセージすべてが見えるように展示する必要があることがあった。

イベント班での議論で、下記の3つの展示方法のアイデアが出た。それぞれについて詰めることにした（〔図表 4-5〕 参照）。

- （A 案）自作の投影機またはプロジェクターによるメッセージの投影
- （B 案）天井からランプを吊るし、その四面にメッセージをはる
- （C 案）壁にランプを掛け、その隣にメッセージを掛ける

A 案は、600 枚のメッセージ・シートをすべてつなぎ、それをスライドさせながら投影機で壁に映し出す案である。長岡技術科学大学院の山内さんと加治アドバイザーとの相談を通じて浮かんだアイデアだった。しかし、600 枚をつないだシートは非常に長い帯になる。来場者が自分のシートを探すのも難しい。さらには相当な製作費が必要になりそうだったこともあり、断念した。また、スキャナーで取り込んでパワーポイントデータとして投影する案もあったが、これも個々のシートを探すのが難しい点で上の案と同様であり、

諦めた。

〔図表 4-5〕 考案されたメッセージ・シート展示法（左から A 案・B 案・C 案）



B 案は、トチオノアカリの大型糸繰り枠ランプの四面にメッセージ・シートを貼り付けて、天井から吊す案だ。西片会長から、大型ランプは 100 個貸していただけると連絡頂いていた。この方法で 300 枚以上のメッセージが展示でき、一つ一つのメッセージも見やすいと考えられた。この案を採用する方向で詰めることにした。

しかし、この B 案によってもまだ残り約 300 枚分のシートが展示できない。引き続き検討を進める中で考案されたのが C 案である。トチオノアカリのランプとメッセージを交互に壁に掛ける案だ。その原案は、メッセージ・シートのみ壁に掛けるアイデアだった。

〔図表 4-6〕 白昼堂で加治アドバイザーと展示レイアウトの検討（2023/7/10）



こうして、B 案と C 案（の原案）が有力なレイアウト候補になり、7 月に白昼堂で試してみることにした。B 案と C 案を現地で再現したところ、天井に吊すランプの明るさだけではギャラリー内が暗く、メッセージが読みづらいことが分かった。そこで C 案の原案を微修正し、メッセージ・シートと通常サイズの糸繰り枠ランプを交互に壁に掛けてみた。すると、隣に掛けたランプの灯りでメッセージの読みづらは解消できた。

すぐに、トチオノアカリ協議会からギャラリー内に飾る通常サイズの糸繰り枠ランプ 200 個を貸していただく手配をして、微修正された C 案で 300 枚のシートを壁に展示することにした。こうして、私たちは 600 枚すべてを展示できる方法を決定できた。

4.3.3 メッセージ・シートの補強法の検討

ただし、上記の C 案にはまだ課題があった。お預かりするメッセージ・シートは薄い透明フィルムである。乱雑に扱うとすぐに折れ曲がり、弱い風でも飛んでしまう。単独で飾るのが難しい素材だった。そのフィルムに何らか加工を施して、展示できるように補強す

る必要があり、それも大きな問題となった。

ゼミでの議論では、〔Ⅰ案〕透明なプラ板にメッセージを貼り付ける、〔Ⅱ案〕メッセージ・シートをラミネート加工する、〔Ⅲ案〕透明なクリアファイルにメッセージを貼り付ける、という三案が出た。Ⅰ案については、プラ板がコスト高であることが分かり断念した。Ⅱ案もラミネートシートが高価なうえ作業効率が悪く断念した。こうして、最終的にⅢ案を採用した。A4サイズのクリアファイルをA5サイズ×4枚に分解・裁断し、それぞれにフィルムを貼り付けるのである。加工は比較的短時間で終わるし、一枚のクリアファイルで4枚分のメッセージ・シートが加工でき、コストも抑えられる。

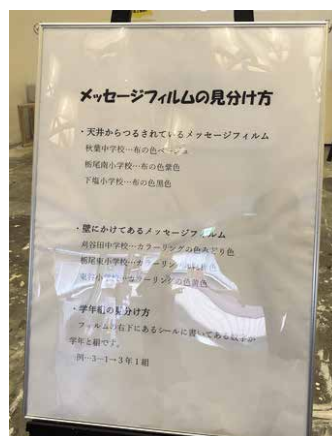
4.3.4 来場者が自分の作品を探しやすくする方法の検討

昨年度のキャンドルライト展では、来場者が自分のランプを探すという視点が完全に抜けて、学校別にレイアウトしなかった。そのため、来場者が自分のキャンドルライトを見つけ出すのが非常に難しく、お叱りをいただいてしまった。今年度その反省点を改善したいと考えた。単にきれいに展示するだけでなく、シートをお預かりする学校別に識別できるように工夫を検討した。

〔図表 4-8〕メッセージ・シートのリング
～学校別に色分け



〔図表 4-9〕学校別の色分け解説パネル



検討の結果、天井から吊すランプに貼り付けるメッセージ・シートに関しては、色分けした布をランプにつけて、その布の色によって学校名を判別できるようにした。他方で、壁に展示するメッセージ・シートについては、シートを壁にかける際に使うリングを色分けし（緑・赤色など）、その色で学校名を識別できるようにした。また、メッセージ・シートの右下に学年と組が書かれたシールをはった（〔図表 4-8〕参照）。

さらに、色と学校名との対応を来場者に伝える説明パネルを作成し、イーゼルで会場中央に設置した（〔図表 4-9〕参照）。来場者から「わりやすい」というお言葉をいただいた一方で、「複雑でわかりづらい」という声もいただいた。一層の改善が必要である。

なお、以上の展示準備においてトラブルが生じた。展示作業中に1校分のシート一式が足りないことに気づいたのである。トチオノアカリ協議会の方と連絡を取り合い、私たちが受け取っている可能性が高いことを確認し、ギャラリーと大学で搜索を続けた。幸いにも、本イベント前日の夕方、観音寺でのキャンドルライト展の準備を進める中で、キャンドルライトの箱に混入していたことがわかり、事なきを得た。

原因は、物品受け渡し時の確認不足である。私たちは協議会から、メッセージ、キャンドルライト、トチオノアカリのランプという貴重な物品を短期間に受け取り、それらをすぐに大学内の倉庫に移動したが、確認が不十分だった。外部の方々との物品受け渡し時には、数量が合っているかなどの確認を慎重に行うことを徹底せねばならない。

（執筆担当）木伏 渉

4.3.5 展示作業の準備～木枠と追加ランプの運搬

メッセージ・シートの展示方法が決まり、私たちは白昼堂堂のインスタレーションに向けて本格的な準備作業を進めた。メッセージ・シートを貼り付けた大型糸繰り枠ランプは天井から吊すことにしていたが、ギャラリー天井の梁に掛け渡す木枠が必要だった。そこで木枠をホームセンターで購入し、店舗のトラックでひとまず大学まで運び、白昼堂堂での作業日に大学から輸送することにした。木枠の長さは 1.8m ほどで、24 本購入した。

〔図表 4-10〕 購入した木枠



〔図表 4-11〕 お借りした大型ランプ



壁に掛ける糸繰り枠ランプ（通常サイズ）はトチオノアカリ協議会から 200 個お借りすることになっていたが、加治アドバイザーから全メッセージを照らすには足りないかもしれないとご指摘いただいた。そこで、急きょ大型のランプ 21 個を追加でトチオノアカリ協議会の方々からお借りできた（〔図表 4-11〕 参照）。

4.3.6 トチオノアカリ本イベントへ向けた白昼堂堂での準備作業

最終の直前準備作業は、9 月 13～15 日の三日間で進められた。

作業一日目は大学での作業が中心だった。お預かりした保護者のメッセージ・フィルムの一枚一枚を展示できる状態にする作業である。フィルムの枚数が多く、イベント担当の班員だけでは人手が足りず、ゼミ内の他の班員にも手伝ってもらって作業を進めた。

ランプに貼り付けるメッセージ・フィルムは補強無しにそのままランプに貼り付け、壁に掛けるメッセージに関しては、透明クリアファイルで作ったシートで頑丈になるように補強した。完成したシートは学校別にまとめておくように注意を払った。

二日目は、大学での作業班と白昼堂堂での作業班の二手に分かれた。大学では前日に続いてメッセージ・シートの作成、およびそれらを学校ごとに色分けしたリングで二枚一組にまとめる作業を行なった。白昼堂堂では、壁にビスを刺し糸繰り枠ランプとリングでまとめたメッセージ・フィルムを掛ける作業を行った。掛ける場所は、学校ごとにまとめて配置した。また、ランプ及びシートが水平にきちんと揃うように、加治アドバイザーから

お借りしたレーザー水平器を活用した（〔図表 4-12〕 参照）。

白昼堂堂での壁の作業を進めるうちに、壁のランプの光量がメッセージ・シートを照らすのに不十分かもしれないと心配になってきた。そこで、さらに追加のランプをトチオノアカリ協議会からお借りしてそれらも壁に掛けた。それにより、メッセージが十分に照らされることを確認できた。

〔図表 4-12〕 壁への貼り付け作業（2023/9/14） 〔図表 4-13〕 ランプを吊るす作業（2023/9/15）



準備の最終三日目、ランプを天井から吊るすために、大学から木杵を搬入し、別途購入していた釣り糸を木杵に結びつけて、その木杵を天井に渡しかける作業を行った。なお、メッセージ・フィルムをランプ四面に貼り付ける作業が完了していなかったため、ギャラリー内でその作業も並行して進めた。さらに、ギャラリー受付やキット販売コーナー、入り口の外にスタンプラリー受付を設営し、翌日の本イベント開始に備えた。

4.3.7 トチオノアカリ本イベント当日の白昼堂堂における業務

9月16日17時、トチオノアカリ本イベントが開始された。私たちは、観音寺やフード等の他の取り組みとも整合させ、ギャラリー担当者のシフト表を作成した。受付、キット販売、ゼミ活動の説明、来場者数のカウントなどを行う体制を整えた（〔図表 4-14〕）。

〔図表 4-14〕 担当者のシフト表

	9月16日(土)	10時	11時	12時	13時	14時	15時	16時	17時	18時	19時	20時	21時	22時
地域連携	高橋				悠久祭						焼きそば	焼きそば	フード片づけ	
	永野				ギャラリー展示準備				ギャラリー受付	記録★	ギャラリー受付	記録★	展示確認	
	佐藤				フード準備				記録★	ギャラリー受付	記録★	ギャラリー受付	展示確認	
	長谷川				フード準備				記録★	ギャラリー受付	記録★	ギャラリー受付	展示確認	
フード	浅田				フード準備				焼きそば	焼きそば	焼きそば	記録	フード片づけ	
	川崎				悠久祭						焼きそば	焼きそば	フード片づけ	
	小島				大学(到着次第フード準備)				フランクフルト	フランクフルト	フランクフルト	記録	フード片づけ	
	中倉				フード準備				焼きそば	焼きそば	記録	焼きそば	フード片づけ	
	長澤				フード準備				焼きそば	焼きそば	記録	フランクフルト	フード片づけ	
	平塚				悠久祭						会計	フランクフルト	フード片づけ	
	賀輪				悠久祭						会計	フランクフルト	フード片づけ	
イベント	木伏				観音寺展示準備				フランクフルト	フランクフルト	フランクフルト	記録	フード片づけ	
	山崎				ギャラリー展示準備				フランクフルト	フランクフルト	フランクフルト	記録	フード片づけ	
	新井				観音寺展示準備				会計	会計	記録	会計	フード片づけ	
	若月				ギャラリー展示準備				会計	会計	記録	会計	フード片づけ	
	池浦				協議会のサポート(終わり次第スタンプラリー準備)				スタンプラリー	記録	スタンプラリー	記録	協議会のサポート	
広報	金子				協議会のサポート(終わり次第スタンプラリー準備)				記録	スタンプラリー	記録	スタンプラリー	協議会のサポート	
	高山				協議会のサポート(終わり次第スタンプラリー準備)				スタンプラリー	記録	スタンプラリー	記録	協議会のサポート	
	外山				悠久祭							スタンプラリー	協議会のサポート	
	渡部				協議会のサポート(終わり次第スタンプラリー準備)				記録	スタンプラリー	記録	スタンプラリー	協議会のサポート	
	阿部				大学(到着次第キット準備)				ギャラリー受付	記録★	ギャラリー受付	記録★	展示確認	
資金	月橋				大学(到着次第キット準備)				ギャラリー受付	記録★	ギャラリー受付	記録★	展示確認	
	櫻井				フード準備				記録★	ギャラリー受付	記録★	ギャラリー受付	展示確認	
	笹川				フード準備				記録★	ギャラリー受付	記録★	ギャラリー受付	展示確認	

シフト表は各班からのヒアリングをもとに調整し、ゼミ生の仕事量にばらつきが出ないようにして、全体として効率的に組んだつもりであった。しかし、今年度は悠久祭と同日開催で2拠点での活動となったため分担が複雑になった。その分、融通がきかず、少しのずれがローテーションを混乱させるケースもあった。ある程度応用のきくシフト編成が望まれる。反省点の1つである。

〔図表 4-15〕 大勢の方が来場（2023/9/16）



〔図表 4-16〕 2日間の来場者数カウンター



イベントの二日間、ギャラリーは大盛況だった。今年度の白昼堂堂には、二日間合計で1,892人と多くの来場者をお迎えできた。観音寺の来場者と合わせると3,367人である（〔図表 4-15〕〔図表 4-16〕参照）。特に白昼堂堂には保護者が子どもたちに向けて書いたメッセージが展示され、子連れのお客様に多くご来場いただけた。

4.3.8 片付け作業、今後に向けた反省

片付け作業では、観音寺での片付けと同様に、昨年度の反省点を十分意識した。昨年度のキャンドルライト展示では学校別に分けて配置しなかったため、片付けの過程で創作物を学校別にまとめる作業に手間取ってしまった。

〔図表 4-17〕 白昼堂堂での片付け（2023/9/17）



今年度は、事前にメッセージ・シートを学校ごとにリングで色分けしていたことで、場所がバラバラにならず、スムーズに片付けができた。ランプに貼ったフィルムの方も、ランプの下に学校別に色分けした布をぶら下げていたことによって、片付けやすかった。な

お、壁に掛けて展示したメッセージ・シートは2枚まとめていたため、少し探しづらかった点に改善の余地が残った。

全体としては、昨年実績を大きく超える来場者を呼び込むことができ、賑わい創出の点で、今回のイベントは大成功だったと考えられる。また、会場で多くの人にランプ商品化の進捗状況や、岐阜県大垣市の祭りとのコラボなどのゼミナール活動の内容を知ってもらえる機会にもなったと思う。来年度は、さらに魅力を向上させ多くの来場者が訪れるようなイベントを作り上げていきたい。

(執筆担当) 山崎 音央

5. フード販売事業と高大連携

5.1 今年度の目標～昨年度の失敗を踏まえて

トチオノアカリ本イベント活性化事業の2つめは、フード販売とその一環での栃尾高校との高大連携である。

トチオノアカリのイベントは、既に栃尾地区の交流人口と滞在人口の増加に大いに寄与しているものの、その成果が経済的に実施団体であるトチオノアカリ協議会へ直接還元される仕組みがない。その新たな収益獲得手段を模索するために、昨年度開始した取り組みの一つがフード販売事業である。また、トチオノアカリの本イベントでのフード不足を解消するねらいもある。過去の本イベントで、来場者から「食べ物が少ない。フード出店が少なく、売り切れですぐ閉店になる」などの苦情が多く寄せられていたと伺った。会場全体のフード提供不足により、せっかくの来場者の満足度が十分高まらず、滞在時間が短くなるという問題があった。その改善も目標だった。

それに対して、昨年度はトチオノアカリ協議会からの委託の形でフード出店に挑戦し、焼きそば、チキンナゲット、ドリンクを販売した。その結果、フード提供で来場者の滞在時間延長には貢献できたが、収支が赤字になり、新たな収益源の開拓としては失敗に終わった。費用抑制の意識不足、事前の安易な売上想定の一つが大きな問題点として残された。こうした昨年度の失敗を踏まえて、プラスの収支を実現してリベンジを果たすこと、それが今年度の私たちの大きな目標になった。

「フード班」メンバーは4年浅田、川崎、小島、3年中倉、長澤、平塚、箕輪の7名である。4月中旬に班編成が固まり、最初の打合せでフード販売事業への取り組みが確認できた。4年生3名は昨年度フード販売に取り組んだメンバーではなかったが、昨年度のゼミとしての失敗を「リベンジしたい」という思いが強かった。他方で3年生4名は、昨年度の活動報告書を読んでフード事業に取り組みたいと考えたメンバーが集まっていた。こうして、私たちは今年度のフード販売事業の成功に向けた活動を開始したのである。

5.2 活動の基本方針の検討～同日開催の悠久祭での出店との両立を目指す

5.2.1 今年度取り組みの大枠の決定

4月、ゼミ全体で今年度の活動の大枠が議論されたなかで、昨年度と同様に活動資金をどう調達するかという点は大きな課題となった。ゼミ全体で取り組むプロジェクトの三本柱は定まったが、それらの実施にはある程度の資金が必要で、大学から支給される予算で

は足りない。私たち自身の手で資金を集めるほかなかった。

そうした中で、フード事業に注目が集まった。トチオノアカリでのフード販売は、本来的にはトチオノアカリ協議会の活動資金獲得に向けたトライアル事業だが、それが確立できるまでの間は、私たちの活動資金源にしたいと考えたのである。

さらにゼミ全体の話し合いの中で、長岡大学悠久祭の模擬店にも出店してはどうかという案が出た。今年度の日程を見ると、トチオノアカリ本イベントと悠久祭は同日（9月16・17日の二日間）である。その点で反対意見もあった。大学―栃尾間の移動に30分程度はかかり、人手の分散で人手が足らなくなる恐れがあったからである。とはいえ、悠久祭の出店にある程度の支援金が大学から支給されることもあり、ゼミ活動資金調達の機会を増やす意味で、ぜひ出店して欲しいという意見がゼミ内で強かった。そうして、9月16・17日にトチオノアカリ本イベントおよび長岡大学悠久祭の両方に店を出すことを最終的に決定した。それを前提に、フード班は計画と準備の詳細を詰めることになった。

5.2.2 フード準備の体制、メニュー、人員配置などの検討

フード販売にはテントでの調理・販売に加え、事前の仕込み作業も必要である。それも含めた大まかな段取りを話し合った。昨年度のトチオノアカリでの出店では、野菜、肉の仕込み作業に、下ごしらえは長岡大学の給湯室をお借りした。今年度も、同様に大学で下準備をする方針を決めた。栃尾と悠久祭とで下ごしらえや買い出し等を別にするとう人手不足になりそうで、できるだけ一緒に進めることで効率的に進みそうだった。

次に、フードメニューとして何を販売するかは大きな問題だった。昨年度は焼きそば、チキンナゲット、ドリンクの3種類をトチオノアカリで販売した。今年度は、悠久祭とトチオノアカリと両方のメニューを検討する必要がある。両方で同じメニューにするのか、別のメニューにするのか、様々なパターンが可能である。昨年度の赤字という失敗の克服、さらに昨年度とは異なる2店舗の運営、これら今年度の新たな状況を踏まえて提供メニューを話し合った。

体制面について、私たちはトチオノアカリと悠久祭のそれぞれで二つの担当グループを作った。トチオノアカリ班は4年浅田、小島、3年中倉、長澤の4名、悠久祭班は4年川崎、3年平塚、箕輪の3人である。各班でリーダーを決め活動する体制にした。

（執筆担当）浅田 篤郎

5.3 販売メニューの検討

5.3.1 メニュー決定までの議論

まずメニューの数を検討した。トチオノアカリについては現地でお借りできるテントの調理・販売スペースを考慮して2品目に決定した。また、悠久祭については、トチオノアカリでの提供メニューとは別に、季節や天候に応じた食品や作りやすさを重視した2商品とするという方向性を決めた。さらに、去年のフード販売ではドリンク販売が大きな赤字要因の一つだったことを踏まえ、ドリンク類はやめて新しいフードを考えることにした。具体的な商品案を詰める際には、ゼミ内の去年のフード販売事業の体験者の意見も含めて、アイデア出しのディスカッションを続けることにした。

〔図表 5-1〕商品と値段案の打合せメモ

トチオノアカリ	
焼きそば、フランクフルト	300円
400円	ケチャップ、マスタード
悠久祭	
スパボ、ポテト (総コッパ)	
200円	塩 300円
コンソメ	コンソメ
砂糖	ケチャップ、マスタード、ソース、のり
※ ②来店話し合うべき課題、③来店までの各メンバーの役割など	
備品、材料	

〔図表 5-2〕フード班での話し合い
(2023/4/25)



そうした中で出たアイデアは以下のとおりである。

〔かき氷〕

加治アドバイザーがかき氷器をお持ちで、それを貸して下さるとお話くださった。そのためコストがかからず、手間も少なく、利益が見込めそうだった。しかし、氷の仕入れと保管が難しそうで、かき氷販売の経験者がゼロのため、最終的に採用しなかった。

〔チキンナゲット〕

定番の人気商品で、昨年度のメニューでもあるが、調理に比較的時間がかかり、フライヤーのレンタルにお金がかかるなどの問題点がある。賛否両論だったが、最終的には昨年度とは違うフードに挑戦しようという考えでまとまり、却下された。

〔スイカ〕

細かくカットし、一切れずつを販売する案である。ただし、イベントは9月中旬で仕入れが難しそうであり、在庫の保存に冷蔵庫が必要となる点で、最終的に却下された。

〔チュロス〕

若い人達に人気と言われ、色々な味付けが可能である。しかし、生地作成に時間がかかり材料費も安くない。この案も却下された。

〔たこ焼き〕

屋台の定番で数をさばきやすい。持ち帰りも容易で、世代を超えて楽しめる。しかし、栃尾にぎわい委員会の広野様から、しっかりしたものを作るには技術が必要とアドバイスを頂いた。業務用のたこ焼き専門道具のレンタルも少ないことから、最終的に断念した。

5.3.2 焼きそば、フランクフルト、スパボ、フライドポテトの4品目に決定

以上の議論を経て決定された販売メニューは、トチオノアカリでは焼きそばとフランクフルト、悠久祭ではスパボ、フライドポテトの計4品である。

焼きそばについては、昨年度と同様に広野様に調理法などをご指導頂けることが期待されたこと、また広野様から鉄板をお貸しいただけるとのお話もあったことが決定要因となった。販売価格は、昨年度同様にワンコインでお釣りがくる400円に決定した。フランクフルトは、仕入れのしやすさ、湯煎等調理のしやすさを重視した結果である。価格は屋台などでの一般的な相場を参照して300円に決めた。スパボについては、栃尾高校での高大連携の授業におけるディスカッションが参考になった(後述)。味付けが容易で、様々な

風味を用意できる。価格は 200 円とした。フライドポテトは、少量の油でも調理可能であることがわかり、手際よく調理できそうだった。紙コップで一食 300 円とした。

振り返ると、以上のメニュー決定までに時間がかかり過ぎて、価格、販売方法、材料準備の段取り等の検討の時間が短くなってしまった。来年度以降の課題である。

（執筆担当）長澤 龍希

5.4 調理法の検討

5.4.1 栃尾にぎわい委員会の広野様への相談

今年度も昨年度に引き続いて、栃尾にぎわい委員会の広野様から私たちのフード事業全般についてアドバイス頂けた。昨年度もご指導頂いたが、時期が遅れて失敗の一因ともなった。今年度は早めにご指導いただき、余裕を持って取り組んで行きたいと考えた。

まず、第一回目の訪問は 6 月 6 日だった。広野様からお借りできる機材、販売メニュー、各調理法、価格設定などについてお聞きした。

広野様からは、大きめの鉄板と保温機を貸して頂けるとの申し出をいただいた。昨年度も鉄板をお借りしたが、小さめで調理中に食材がこぼれ出してしまうことが多々あった。その点を気にしてくださり、大きな鉄板を手配してくださった。

商品案については、焼きそばとフランクフルトを検討中であることをお伝えして、ご意見を伺った。焼きそばについては、昨年度売れ行きが良かったことをお話ししたところ、それは再度取り組むべきだと後押ししてくださった。さらに、一例としてイタリアンの味付けなど、石川ゼミ独自の定番となるような味付け作りに挑戦してはどうかともお話し下さった。フランクフルトは、試作で様々試してみる中で作り方をきめてはどうかとアドバイスをいただいた。

その他に、下記の重要なご指導をいただいた。

- ・上記以外のメニュー案としては、フライドポテトやポップコーンなどは良い。ただし、フライドポテトでは油の事故に十分注意が必要。
- ・パンのようなメニューは夏場に向かない。
- ・利益が少し出る程度の価格にすべき。利益を意識しすぎて高くなると顧客が離れる。
- ・テント内ではアルミパネル等の風除けが重要。火を消えにくくするだけでなく、見栄えを改善できる。昨年度は、調理コーナーで焼きそばがこぼれているのが外から丸見えで見栄えが悪かった。風除けでそれを隠せる。
- ・食材の仕入れ量はできるだけ当日に天候や状況を見て決定し、ロスを最低限にする。

最後に、私たち自身が楽しめるように取り組むべきだ、とお話しくださった。自分たちが楽しめないようでは、結果的にうまくいかないとのことのお言葉だった。

5.4.2 広野さんへの二回目の相談

私たちは 9 月 1 日に再度広野様を訪問した。トチオノアカリ本イベントを半月後に控え、焼きそばの調理練習をお願いすることが重要な目的だった。この日、広野様は私たちのために、アドバイザーとして食堂たからや様もお呼びくださっていた。

まず、お借りできる機材を最終確認させていただいた。大型の鉄板は既にさび取りの処

理を済ませてご用意下さっており、私たちはそれを大学に持ち帰ることができた。鉄板を置く台についても、私たちのために自作してご用意くださっているとのことだった。

バーナーも貸してくださり、保温機も昨年度同様に2個貸して頂けるようになった。しかも、来年度以降も必要となる可能性があることから、その保温器を私たちに寄贈してくださるとの大変ありがたいお言葉をいただいた。今回、食堂たからや様および広野様からの主なアドバイスは以下のとおりだった。

- ・風除けはコの字型で作成するのが良い。耐火ボードやベニヤ板にアルミホイルなどを巻いて燃えないようにすれば良い。
- ・テントの見栄えが悪いとお客様の印象が悪くなる。対策の一つとしてブルーシートを下に敷いて汚く見えないようにすることが大事。
- ・フランクフルトは作業効率面から袋ごと湯煎するのが良い。

以上のアドバイスを取り入れ、私たちは最終的な準備を進めた。また、翌週の9月6日には栃尾で広野様に焼きそば調理を直接ご指導いただくことになった。

〔図表 5-3〕 広野様訪問（右に食堂たからや様同席）（2023/9/1）



5.5 各メニューの最終準備

5.5.1 フライドポテトとスパボアの調理法を決定

私たちは、悠久祭で販売するフライドポテトの詳細を詰めた。フライドポテトの冷凍素材は数多く販売されている。どれを使うのか、また味付けをどうするかを決める必要があった。さらに、油の量が変わると適切な調理時間も変わる。実際に試さねばならなかった。

7月11日のゼミの授業時間を利用し、大学の調理室をお借りして試食会を開催した（〔図表 5-4〕 参照）。小さめの鍋を使用する予定だったので、少なめの油でどのくらいの時間が適切なのかを試した。小さい鍋ではロングサイズのポテトはうまく調理できないことが分かり、ショートサイズを使うことにした。また、手順を単純にするため冷凍ポテトを解凍せずにそのまま油に入れ、油がベストな温度になる時間をチェックした。

ゼミの試食会での結果をもとにして、一袋 375 円（1kg、税込）の商品に決定し、味付けは「塩」「バター醤油」「コンソメ」「激辛」の4種類に決めた。調理時間は1分、3分、5分をそれぞれ試し比較した結果から、3分に決まった。

続いてスパボアである。こちらについても、私たちは当初調理方法がわからなかった。パスタには様々な種類がある。まずは標準的なパスタをフライドポテトと同じ時間をかけて揚げてみたが、焦がしてしまった。その後、揚げる時間の長さを変えて繰り返し試行し、ちょうど良い硬さになる時間を模索した。

硬さが調節できた段階で味付けをした。それをフライドポテトとあわせてゼミ生のみんなに試食してもらった。その結果をもとに、使用するパスタの種類、味付け、調理時間の

微調整を検討した。当初、あまり味が感じられないとの意見が多かったが、油で揚げた直後に味付けすることで改善できた。

最終的に太さ 1.4mm と 1.9mm の 2 種類（ともに 500g、税込 106 円）のパスタを使用することに決めた。太さが異なる 2 種類のパスタを使用することで、食感にインパクトを加えようと考えた。味付けはフライドポテトと同じ 4 種類とした。調理時間は太さに関係なく 30 秒、1 分、1 分 30 秒で試作し、1 分に決まった。

〔図表 5-4〕 試食会のための調理（2023/7/11）



（執筆担当）小島 伊織

5.5.2 フランクフルトの調理を試行

トチオノアカリで販売するフランクフルトも私たちにとって初のメニューで、こちらも調理法をゼロから模索せねばならなかった。その検討の第一弾として、大学近隣の業務スーパーで食材を調査した。フランクフルト関連商品の種類は豊富で、様々な種類を試して最適な食材を探すことにした。大別して棒付きと棒無しがあるが、調理後に棒を後からつけて販売するのは非効率だと考え、まずは棒付きを試した。

実際に湯煎処理で棒と一緒に茹でると、棒がふやけてしまう。そこで、棒の部分は茹でないように水の量を減らすなどして調節した。茹でる時間の長さも問題だった。茹で過ぎるとフランクフルトが破裂してしまうし、逆に茹でが足りないと中まで熱が通らず美味しくない。適切な時間を見いだすため試行錯誤を続けた。

夏休み期間中の 9 月 4 日にゼミ授業が実施され、それにあわせてフランクフルトの試食会を実施した。その時までには絞った 3 種類の食材候補について価格、味、調理のしやすさの観点から比較検討をして、調理方法と調理時間の最終確認を行った。

こうして食材の商品と調理方法を決定した。水の入替え作業も考慮して、袋に入ったままの状態でボイルすることにした。茹でる時間は 5 分、10 分、15 分で試した結果、最適だった 15 分に決めた。

5.5.3 焼きそば調理の練習

焼きそば調理については、前述のとおり多くの機材を広野様と食堂たからや様にお貸しいただけることになっていた。プロパンガスは、昨年度同様に栃尾地区の小町屋商店様からのレンタルを手配した。鉄板は 9 月 1 日の栃尾訪問時に広野様からお借りしていたが、その時のご指導に従い、その鉄板に油をなじませる作業が必要だった。大学の調理室をお借りし、油を塗布し火にかける作業を 3 回繰り返し、研究室で保管してもらった。

広野様からアドバイス頂いた風よけの作成にも取りかかった。当初はベニヤ板にアルミ板を貼り付けて作成しようと考えていたが、ホームセンターの方のアドバイスにより家庭用のコンロカバーを4枚購入して、それらを針金とアルミホイルで繋ぎ合わせて作成した。

〔図表 5-5〕 広野様・食堂たからや様による焼きそば調理の実習指導（2023/9/6）



9月6日、広野様に焼きそば作りをご指導いただく日である。フード班の4年浅田、川崎、小島、3年中倉、箕輪に地域連携推進班リーダーの4年高橋も加わった6人が、肉、野菜、麺、調味料などを準備して栃尾商工会裏の駐車場に向かい、広野様に調理を指導いただけた。広野様が場所を手配して待機して下さり、食堂たから屋様と「とちパル」の島田様も応援に駆けつけて下さった（〔図表 5-5〕 参照）。

小町屋商店様がプロパンガスをセッティング下さり、広野様の解説に続いて焼きそばの調理に取りかかった。まず、火の付け方から引っかけた。ゼミ生にとってバーナーを使うのは初めてで、点火だけでも難しかった。

調理で鉄板に載せるのは肉→野菜→麺の順番だ。いずれも素早く入れ、素早く混ぜねばならない。ソースは計量カップを使い、味が均一になるよう指導頂いた。最後に、盛り付けで昨年度使用した小さめのパックを使ったが、一杯詰まっているように見えて、お客様からの印象は良いとのアドバイスだった。最終的に、何とか一通り焼きそばは完成できたが、彩りが少ないと指摘頂いた。追加具材の工夫で改善できるとのことだった。

こうして実際に指導して頂きながら調理してみることで、一食の調理にかかる時間、調味料の分量、鉄板の変形等、重要な情報を体験で共有できた。なお、来年度以降も含めて、お忙しい中を毎回広野様にご指導をいただくのは難しいため、今後私たちだけでも練習できるように今回の調理の様子は動画を残してデータを共有した。

5.5.4 悠久祭に向けた最終準備～仕入れ量と販売価格の決定

他方で、悠久祭への出店は今年度が初めてである。売れ行きを見込むために参照すべき過去の情報はないが、それでも食材の仕入れ量決定のために、前提となる販売数量を予想する必要があった。悠久祭実行委員会からの事前情報で、私たちの販売商品であるフライドポテトは他にも出店があることが分かっていた。後述の価格設定も踏まえ、少なめに見積り、予想売り上げ数を60人分とした。もう一方のスパボーについては、より軽めの食品であることからフライドポテト以上の販売数は見込めないと考え、50人分に設定した。それをもとに食材の仕入れ量を決定し、間に合うように手配することにした。

販売価格については、私たちのマンパワーを考慮して高めに設定した。悠久祭担当班は3名のみで、2名で接客と調理をこなさねばならない時間帯もありえる。安くすると顧客

が集中しお待たせしてしまい、かえって顧客を逃してしまう可能性もある。また、閉店前の割引の可能性も考慮して、フライドポテト 300 円、スパボー200 円とした。

出店に伴い大学から 4 万円の補助金を支給頂いたことから、それをもとに、パスタ・ポテトなどの食材、調味料や調理器具、保存用のクーラーボックスを購入し体制を整えた。

（執筆担当）箕輪 諒大

5.6 トチオノアカリ本イベントでの活動

5.6.1 イベント当日の会場での最終準備

トチオノアカリ本イベントおよび悠久祭当日の 9 月 16・17 日の 2 日間、フード班メンバー全員は午前中から始動した。トチオノアカリと悠久祭の二手に分かれ作業を進めた。

朝、トチオノアカリ担当班は、購入予約をしていた食材を業務スーパーで受け取り、各具材を調理一回分で使う量に分けて袋詰めし、テントでの作業効率化を図った。大学から自動車で会場に移動し、到着後は栃尾商工会裏のナイトマルシェ会場でテントの配置を確認して、テント内の長机等の配置を決めた。私たちのテントは、広野様の出店店舗の横に配置して頂いていた。広野様の事前のご配慮だった。営業中にも広野様のアドバイスが頂きやすく、とても心強かった。

テント内では、販売メニューの焼きそば、フランクフルトの調理について事前にしっかり練習して勝手がわかっていたため、比較的スムーズに準備できた。それでも、会計や機材はどう配置すれば効率よく動けるのか、直前にテント内で確認する必要があった。また、ゼミ全体のシフト表に従って他の班メンバーにも協力してもらい、主にお客様と代金をやりとりする会計を担当してもらう体制となった。

開店時間が近づき、機材を準備した。焼きそばでは、麺を焼く鉄板とガスバーナー、商品を作り置きする保温機を設置した。フランクフルトでは、湯煎の鍋とコンロを準備し、保温機は焼きそばと共用にした。

準備の最後として、開店時刻直前に試作品を調理した。作り置きにすると同時に、味見により調味料の量などの最終確認を行った。作り置き用の焼きそばの盛り付けでは、予定のものとは違うサイズの大型パックを誤って使うというミスがあったが、幸い隣のテントの広野様からご指摘いただけて、前もって気付くことができた。フランクフルト湯煎用に水を沸騰させる時間がかかるため、その調理準備は早めに開始し、事前に決定していた調理時間を改めて確認した。こうして、作り置きの用意と、調理から販売の一連の流れを確認できて、万全の状態となった。

5.6.2 いよいよ開店

9 月 16 日の夕方 5 時、いよいよトチオノアカリ本イベントが始まった。在庫切れで回転率が落ちお客様をお待たせすることがないように、イベント開始前から調理を開始して保温器に在庫をストックした。ただ、保温器に虫が集まり、その対策が今後の課題となった。天気は良く、開店後に多くのお客様に来店いただけた。開店前の段階からテント前に来られ、後で買いに来る旨を伝えてくれるお客様もおられた（〔図表 5-6〕〔図表 5-7〕参照）。

初日は、テント前で積極的な声かけと呼びこみの甲斐あって、多くのお客様に足を運

んでいただき大盛況だった。焼きそばとフランクフルトのどちらも予定数量を売り切った。特に焼きそばは、2日目に回す予定の食材分も含めて完売となった。

〔図表 5-6〕 開店後、テント前のお客様 (2023/9/16) 〔図表 5-7〕 賑わうナイトマルシェ



2日目は、前日に仕込んでおいた食材を1日目で全て使い切ってしまったことから、予定より早めに集合し、追加で食材の仕入れと仕込み作業に取りかからねばならなかった。食材購入で購入予定のスーパーの在庫が足らなくなり、他店舗も数軒回って買い集める必要があった。

フランクフルトについては、テント前でお好みにあわせてケチャップをお客様にとっていただく体制にしていたが、1日目の営業中にお客様からマスタードが欲しいとの声をいただいた。そこで、急きょマスタードを購入して準備した。

夕方になり、2日目の営業が開始された。1日目と同様に声かけを積極的に行い、効率的な動きを絶えず意識しスムーズな店舗運営にも気を配った。

〔図表 5-8〕 2日目朝の食材仕込み作業 (2023/9/17)



最終的に、焼きそば、フランクフルトのどちらも用意した分すべてを販売できた。二日間の合計で、売上高 16 万 500 円、支出 11 万 380 円で 5 万 120 円の黒字を達成できた。昨年度のリベンジを果たせたのである。

昨年度の失敗経験を活かし、厳しめの収支見通しに基づいた仕入れが奏功した。焼きそばという昨年度の売れ筋を継続して取り上げた点も良かった。大幅な黒字で終わった点で、今年度のトチオノアカリでのフード事業はその役割を果たすことができたといえる。

(執筆担当) 中倉 力輝

5.7 悠久祭当日のフード販売事業

5.7.1 悠久祭当日の直前準備の作業と役割分担

悠久祭のフード事業は、4年川崎、3年平塚、箕輪の3人体制である。1日目と2日目

どちらも朝 7 時半から出店準備を開始した。テントの設営作業には広田ゼミ、悠久祭の運営本部のみなさんが手伝って下さった。続いて、テント内で机・椅子・プロパンガスなどの設置、物販用看板と POP、その他備品の整理と調理準備を進めた。コンロ、ガス缶、ガスボンベの動作確認、食材や調味料系、調理器具などの過不足も確認した。

同時並行で開催中のトチオノアカリ本イベントの PR にも取り組んだ。「トチオノアカリ 2023」のパネルとトチオノアカリ糸繰り杵ランプもテントに飾った（〔図表 5-9〕参照）。

食材については、当日の気温が高かったことを考慮し、保管中に傷まないように当日朝に用意して悠久祭が開始された後に調理を始める段取りとした。

〔図表 5-9〕 悠久祭でのトチオノアカリ PR と販売準備（2023/9/16）



私たちは、①フード調理、②調理補助とフード提供、③会計、という 3 つを 3 人それぞれに割り振る体制とした。このうち②調理補助、③会計の 2 人は、来店客にトチオノアカリの PR も行うことにした。人員に余裕がないためローテーションではなく 3 人の役割を固定したが、食材や備品が切れてしまった場合に急ぎょ買い出しに行く必要があり、2 人でギリギリ回さねばならないこともしばしばあった。そのため、3 人は休憩時間がほとんど取れなかった。フード事業全体での人材配置の改善は今後の大きな課題である。

5.7.2 悠久祭での販売活動

9 月 16 日午前 10 時前、悠久祭が開始され、私たちを含めほぼ全ての模擬店が販売を開始した。2 日間ともに雲がほとんどない好天で気温は 30℃近くまで上がり、「真夏日」という言葉が相応しいほどだった。そのため、熱した油を沢山使用するフライドポテトの調理工程は相当厳しい業務となった。

開店後、午前中はお客様がちらほら来られる状況だったが、午後になるとかなり暑くなった中でも客足が伸びて、行列ができることも多くなった。なお、途中からテント前にスパボーとフライドポテトの試食を用意したが、その効果で寄って下さったお客様も多かった。さらに、PR でテント前に展示した「トチオノアカリ」の看板や糸繰り杵ランプについて質問するなど興味を示して下さる方々も多々見られた。

悠久祭ではお笑いライブを始め様々な企画が行われ、各イベント直後に来店客が多く、混雑時と閑散時の差が激しかった。

2 日目の終盤には、ラストスパートを掛けて売れ残りをなくすために、悠久祭全体での取り組みとして割引販売を行った。その結果約 20～30 分の短時間で 10 食以上を販売できた。売上増加に寄与した一方、非常に多忙となりお客様を捌き切るのが大変だった。

〔図表 5-10〕 テント内での調理（左）とお客様の列（右）（2023/9/17）



5.7.3 悠久祭出店の結果と反省点

2 日間の悠久祭でのフード販売の結果、合計 2 万 6,500 円の売上となった（内訳等の詳細は〔図表 5-11〕参照）。表中の「割引券」は大学側が発行する金券で、1 枚 100 円分の割引に使用できる。

事前予想ではスパボの認知度の低さ、フライドポテトの量産の難しさなどから 2 日間合計 70～80 食程度と見ていたが、実際にはそれを大きく超えて 100 食以上を販売できた。人手不足で宣伝や呼び込みが十分できず、調理と提供の体制の維持が厳しかった中では上出来だったのではないか。売上金額も 2 日間とも 1 万円以上を記録できた。フード販売への真摯な取り組み、疲弊しても協力により売り切る、そうした意識を 3 人で徹底できたからこそ、この結果に繋がったのだと思う。

数値による把握は難しいが、フードの販売業務とあわせて「トチオノアカリ」の PR もある程度推進できた。パネルや糸繰り杵ランプ現物をテントに配置したことで、フードを買っていただいた方や立ち寄っていただいた方にトチオノアカリを PR でき、興味を持っていただけた。

〔図表 5-11〕 悠久祭でのフード事業のまとめ

日付	販売項目	売上点数	売上金 (現金：円)	売上金 (割引券：円)	売上金合計 (円)
9月16日	フライドポテト（価格300円）	25	7,300	200	7,500
	スパボ（価格200円）	21	3,900	300	4,200
	合計	46	11,200	500	11,700
9月17日	フライドポテト（価格300円）	25	6,900	600	7,500
	スパボ（価格200円）	24	4,300	500	4,800
	割引フライドポテト（価格200円）	10	2,000	0	2,000
	割引スパボ（価格100円）	5	500	0	500
	合計	64	13,700	1,100	14,800
2日間計		110	24,900	1,600	26,500

一方、この悠久祭のフード販売事業では課題も少なくなかったと考える。

まず、売上金額にはまだ伸びしろがあるようにも感じられる。2 日間合計 100 食以上販売したとは言え、それでも他の模擬店と比べると売上は多少劣っていた。スパボは調理が簡単だが、200 円と安価である。原価率が低く利益を生みやすいとは言え、大量に売らないとまとまった金額にならない。もう少し売上金額を上げやすいフードを考案すべきだ

った。唐揚げ、クレープのようにオーソドックスでかつ売りやすいフードでも問題なかったと考える。加えて、ドリンクやデザートといった「ついで買い」を促進するメニュー構成も検討すべきだろう。

より大きな課題は、人員不足でスタッフの行動がかなり制約された点である。悠久祭ではお客様が殺到した訳ではないが、それでも3人によるローテーションは大変厳しかった。呼び込みが不十分となったのに加えて、フード提供の回転率が上がりず顧客を逃したことによる損失は小さくなかったと思われる。また、3人は休憩時間がとれず、悠久祭での他の出店・イベントをほとんど見学できなかった。来年度以降、フード事業全体の人員配置の改善が必要である。

(執筆担当) 川崎 太暉

5.8 フード事業全体のふりかえり

以上の通り、トチオノアカリ、悠久祭、ともに好業績で終えることができたが、来年度以降に向けてフード事業での改善すべき点を整理しておきたい。

一つ目は、上記でも触れた悠久祭における人員配置の適正化だ。今年度は悠久祭とトチオノアカリの同時出店で、双方の人員配分はゼミ全体で一層しっかりと検討しておくべきだった。より多くの人員を配置したトチオノアカリ側のフードでさえ、会計やお客様への対応、調理のアシストなどで手が回らなくなる事態が多く生じた。結果的に、開店から閉店まで、ずっと他の班の手助けが必要だった。さらに深刻だったのは悠久祭担当者である。班以外のメンバーを含めたローテーションを組めず、完全に3人のみのオペレーションとなった。フード販売では、その規模にかかわらず、接客受け付け、調理、会計、追加買い出し、声かけなどと必要な業務は多く、3人では休憩もできなかった。

二つ目は材料・機材準備の充実だ。今年度は売上げ個数の見通しを厳しく見過ぎて、事前の想定より多く売れたことにより1日目、2日目ともに材料・調味料不足が生じた。トチオノアカリ側では他班のメンバーに買い出しをお願いし、悠久祭での出店が終わり駆けつけたメンバーにも大学から栃尾に来る際に買ってきてもらうなどして対応したが、それでも調理に必要な人員を減らさざるを得ず、回転率が低下し、お客様を逃がしてしまった。

三つ目は甘かった時間管理だ。私たちは二日間とも午前中から準備を進めたが、まるで時間が足りなかった。特に仕込みに多くの時間がかかった。トチオノアカリ側については、大学で下準備のすべて終わらせることができず、会場テント内で調理と平行して進める形になってしまい、スペースや人員の無駄遣いに繋がってしまった。

すべてに共通して言えることは、準備不足の面が大きかったということだ。不測の事態は別にしても、各担当者が自分の任務についてもう少し考えを深めていれば事前に想定して回避できた問題もあったと思う。今回浮上した課題を全体で共有し、改善案を考案し実行すること、引継ぎ時にしっかり注意点や工夫を伝えることなどが必要である。

(執筆担当) 中倉 力輝

5.9 栃尾高校との高大連携～フード事業を題材に

5.9.1 今年度の高大連携の概要

2019 年度以来、長岡大学（石川ゼミナール）は栃尾高校（商業コース）との共同授業などによる高大連携事業を推進してきた。

私たちは、その伝統および高校との貴重な関係を受け継ぎ、今年度も栃尾高校とのコラボは進めたいと考えた。今年度は、栃尾高校総合学科の商業コース 2 年生 13 名が私たちとの共同授業に取り組む事になっていた。その「マーケティング」授業でのコラボだった。

今年度は、私たちのフード販売事業をいかに成功させるかが高大連携テーマとして設定された。私たちフード班が抱える問題である販売商品の決定、価格戦略、販促方法などについて考えることは、栃尾高校の皆さんのマーケティングの授業としても、適切な実課題への取り組みになりそうだった。その点で、フード班主体で高大連携事業が進められた。

5.9.2 共同授業 1 回目（6 月 13 日）

私たちは 6 月と 7 月に計 2 回栃尾高校を訪問して共同授業を実施した。訪問したメンバーは、フード班の 4 年浅田、川崎、小島、3 年中倉、長澤、平塚に資金班 3 年櫻井、笹川、地域連携推進班 3 年佐藤も加わった計 9 名である。残りのメンバーは大学に残って、大垣市との連携やトチオノアカリ本イベントの準備、資金調達、広報等の作業を進めた。

一回目の共同授業は 6 月 13 日である。今回の参加メンバー全員にとって、初めての栃尾高校訪問だった。大学で授業進行に関して確認した後、高校に向けて出発した。栃尾高校では、村山先生が玄関で私たちを出迎えてくださった。村山先生が教室へ案内くださり、それに続いて高校生の皆さんが入室した、高校生と大学生が初めて顔を合わせ、緊張のなかで授業が開始された。

冒頭、栃尾高校の村山先生とゼミの石川先生から、高大連携の意義などについて短い説明があり、石川ゼミの活動の説明がされた後、高校生 13 名と大学生 8 名（1 名欠席）が高校生・大学生混合の 4 グループに分かれた。各グループで、大学生→高校生の順で簡単な自己紹介を行なった後、グループワークが開始された（〔図表 5-12〕参照）。

〔図表 5-12〕 同授業 1 回目（2023/6/13）



〔図表 5-13〕 終了後に高校玄関で記念撮影



各グループでは、①トチオノアカリのイベントで何を売るべきか（利益率の高いもの、提供が容易なもの、会場で売れそうなもの等）、②価格設定をどうするか、という 2 テーマが設定され、大学生が高校生に対して質問をする形でワークが進行した。昨年度の共同授業の方式に習って、今年度も KJ 法により、高校生から出た貴重なアイデアを付箋に書いて、模造紙に貼って整理していった。教頭先生が途中からその様子を見学して下さった。

〔図表 5-14〕 ディスカッションで出た販売メニュー案（上位 5 つ）

順位	商品名	票数
1	たこ焼き	6
2	やきそば	5
3	アイス、かき氷、クレープ	4
4	チョコバナナ、からあげ、フランクフルト、	3
5	りんご飴、焼き鳥、ポテト、ポッポ焼き	2

20 分程度の話し合いの後、各班の代表者がグループワークでのアイデアを教室全体で発表した。高校生から最も多く声が上がった上位 5 つの商品案は〔図表 5-14〕のとおりである。その他にも、油揚げ、オムライス、団子、チュロス、10 円パン、おでん、とん汁、ケバブ、イカリング、スパ棒、たい焼きなどといった案が上がった。チュロスや 10 円パンは、それまでの大学でのアイデア出しではなかった案である。高校生らしい非常に柔軟なアイデアに感じられた。大学での議論で参考にしたいと考えた。

価格設定に関しては、たこ焼き 500～600 円、焼きそば 400 円、かき氷 300 円といったアイデアが目立った。高校生と大学生との間でそれほど乖離はないように感じられた。

発表後、石川先生が翌月の次回の共同授業に向けた説明と課題について説明し、村山先生から共同授業に対するお言葉をいただき、1 回目の共同授業は終了した。

5.9.3 共同授業 2 回目（7 月 18 日）

2 回目の栃尾高校での共同授業は約一ヶ月後の 7 月 18 日だった。この一ヶ月の間に、フード班は高校での議論も参考にして、悠久祭で販売する商品をフライドポテトとスパボー、トチオノアカリで販売する商品を焼きそばとフランクフルトに決定していた。

2 回目の共同授業の参加メンバーは前回と同じで、授業内容は前回同様に班別でのグループワークが中心だった。今回の話し合いのテーマは、①悠久祭で販売する商品（フライドポテト、スパボー）の価格設定、②売り上げを伸ばす販促方法、の 2 つである。

価格設定に関しては、スパボーが 200 円（9 票）、250 円（5 票）、ポテトが 300 円（9 票）、400 円（4 票）といった意見が多かった。また、売り上げを伸ばすための PR 方法・売り方に関しては主に以下のような案が出た。

- ✓ 当日までにゼミの SNS アカウントにツイートした人に割引をする
- ✓ 駅、商店街店舗、電柱などに PR ポスターを貼る
- ✓ 前売り券を発行し域内の店舗を回って販売する
- ✓ ゼミのインスタグラム QR コードを商店街の店舗に掲示してもらう

その他にも、チラシと引き換えで割引、セット割引、スパボーは透明または色付きの紙コップで販売、フライドポテトをマクドナルドのように紙袋で販売する、などの案が出た。

今回は 1 回目とは違う班メンバーで組み直してグループワークを行った。それでも、二度目の授業ということもあり、高校生に緊張の様子はあまり見られず、前回よりも積極的にアイデアが出た。

2 回の共同授業を振り返ると、1 回目の共同授業では高校生が終始緊張しているように見受けられた。もう少し高校生の意見を引き出せるようなサポートを心掛けるべきだったと思う。一般に、高校生が大学生とグループワークをする機会はない。緊張して当然だろう。自己紹介の際に共通の趣味があったら趣味の話で会話を盛り上げたり、自己紹介の内容を深堀りしたりするなど、高校生にもっとリラックスしてもらうように寄り添えば良かったと反省される。そうすることで、高校生が萎縮することなく、より多くの意見を言えて、一層建設的なディスカッションができただろう。

来年度、ゼミでは現 3 年生が新 3 年生をリードして高大連携を継続していくことになる。その点で、今回共同授業に初参加の 3 年生が栃尾高校の村山先生や生徒の皆さんとの親交を深めることができたことは良かった。2019 年度以来の栃尾高校と長岡大学の高大連携を今後につなぐことができた意味で、私たちの取り組みは非常に有意義だったと思う。来年度の共同授業では、高大連携を一層強化させていきたい。

(執筆担当) 平塚 光

6. ランプキットの販売

〔図表 6-1〕簡易キット（完成品）

6.1 キット販売に取り組んだ経緯

トチオノアカリ本イベント活性化事業の 3 つめは、ギャラリー白昼堂堂での糸繰り杵ランプの簡易キットの販売プロジェクトである。昨年 12 月に初めて実施した取り組みの再挑戦である。4 年阿部、月橋、3 年桜井、笹川の資金班 4 人が担当した。

糸繰り杵ランプは、まちの駅「とちパル」でかつて販売されていたのを除くと、あくまでイベントで飾るためのもので、非売品である。

そこで、人々にキットの簡易ランプを自宅のインテリアとして飾ってもらえれば、常にトチオノアカリ糸繰り杵ランプに接してもらえ、その知名度とブランド力の向上につながる。自分で色を選び自分で糸を調整でき、自分だけのオリジナルランプが作製できるキットには多くの人にとって魅力がある。トチオノアカリのイベント以外でも、多くの方に糸繰り杵ランプの魅力を届けること、それがキット販売の目的だった。

さらに、とりわけ今年度については、キット販売からの収入をゼミの活動資金に充てたいというねらいもあった。後述の通り、今年度は公的補助金を獲得できなかった。そこで、自助努力により少しでも多くの資金を集める必要があり、キットの販売収入でそれに貢献できると考えたのである。

今年度販売を実施するかどうかは、資金班で判断することになった。その話し合いでは、昨年度 12 月の販売が芳しくなかったことから、慎重意見もあった。とは言え、昨年度は私たちのゼミ単独イベントでの販売で、会場への来場者そのものが少なかったことが失敗の最大の原因だった。今年度はトチオノアカリ本イベントにおける販売である。白昼堂堂で栃尾の人々のメッセージ・プレート展示によるインスタレーション開催が決定していたことから、多くの来場者が見込め、キット販売は活動資金集めに寄与するのではないかとい



う意見が大勢となった。

最終的に、今年度も9月16日、17日のトチオノアカリ本イベントで白昼堂堂にてキットの販売を実施することとした。昨年度に糸繰りの木杵と糸を提供下さったトチオノアカリ協議会の西片会長に、キット販売と資材提供を承諾いただけた。

6.2 販売方法などの詰め

資金班では、昨年度の反省も踏まえて、より多く販売するための具体策を話し合った。以下の3点がポイントとなった。

一つ目は「価格」である。昨年度は1セット1,000円で販売し5個しか売れなかった。その経験を踏まえるとともに、誰でも「気軽」に体験してもらいたいという意見もあり、今年度は1セット500円に値下げすることにした。

二つ目は「商品仕様」である。キットは、①繊維のまち枋尾で過去使用された実際の織機の糸繰り木杵、②枋尾産の糸、③電池内蔵LEDライトの部品3点を組み立てる商品である。糸について、昨年度はお客様に好きな色を3色選んでいただく方式だったが、今年度は2色とした。少しでも利益が出るようにしたかったことが一つの理由である。さらに構造上の配慮による理由もあった。キットの作製手順の最後は糸を巻いた木杵にライトキャンドルを入れる工程である。糸を巻き過ぎないで隙間を残さなくてはならない。3色から2色に減らすことで巻き過ぎを予防できるとも考えた。

三つ目は「制作コーナーの設置」である。昨年度同様に、今回もトチオノアカリ本イベント当日の白昼堂堂に制作体験コーナーを設け、トチオノアカリ協議会からお借りする糸巻き器を設置することにした。キット購入者が自宅で木杵に糸を自力で巻きつけることも可能だが、大変な作業となる。お客様に会場で糸巻き器を使って組み立てていただくことにより、体験を楽しんでもらい、しかも完成品をお持ち帰りいただける。また、ギャラリーに足を運んでいただいた方々の関心をできる限り集めようとした。その場で制作される様子を見た他のお客様の関心を集めることもできる。特に子どものたちの目に留まるのではないかと考えた。

6.3 キット販売の準備

夏休みに入り、私たちはキット販売の準備を進めた。販売コーナーに用意するキットの数は、昨年度の実績に鑑みて、本イベントの1日目用に15個、2日目用に15個、計30個用意することにした。そのために必要な資材の用意に取り掛かった。

キットのための材料類・機材としては、糸を巻きつける木杵、糸、木杵の中に入れるライトキャンドル、糸巻き器が必要である。昨年度の販売時に準備した資材の一部が研究室で預けてあったことから、まずそれらの在庫を確認した。

木杵は研究室に在庫が少しあったが不足するため、追加で西片会長に提供頂いた。糸は、昨年度準備した糸の在庫を活用するとともに、追加の糸巻きも準備した。そのために、研究室で保管されていたプラスチック製の糸巻にインパクト・ドライバーで糸を巻き付ける作業を行った。中に入れるライトキャンドルについては、昨年度ダイソーで購入した在庫を利用した。糸巻き器は、昨年度同様にトチオノアカリ協議会から再度お借りした。

〔図表 6-2〕 キット販売 PR パネル



〔図表 6-3〕 販売・体験コーナーの準備



会場には、長机とイスが必要だった。糸巻き器 2 台を置く長机と、お客様用のイスである。大学からお借りしようとしたが、トチオノアカリ本イベントは大学の悠久祭と同日開催で多くの団体が使用するため、早めの予約が必要だった。白昼堂堂での展示の準備全般は「イベント班」担当で、大学からの機材借り入れの窓口になっていた。資金班メンバーはイベント班に必要な机とイスの数を伝えて手配をお願いし、無事お借りできた。

(執筆担当) 月橋 唯奈

6.4 イベント当日～キット販売コーナーは大盛況

以上の準備を完了させて迎えた 9 月 16 日の夜、ギャラリー白昼堂堂内のキット販売コーナーは、多くの来場者の関心を集めることができた。糸巻き器や宣伝パネルが来場者の目を引いたこと、受付担当者が積極的に呼びかけを行ったことなどの効果による。

ギャラリー入り口近くで、糸巻き器を操作する様子が来場者の目に留まるように机を配置したことも奏功した。来場した子どもたちからは「やってみたい!」という声が多く聞かれ、その声におされて実際に購入し体験して下さる親子連れが少なくなかった。

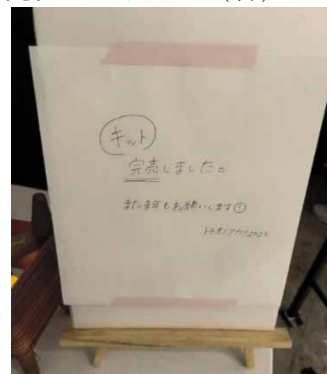
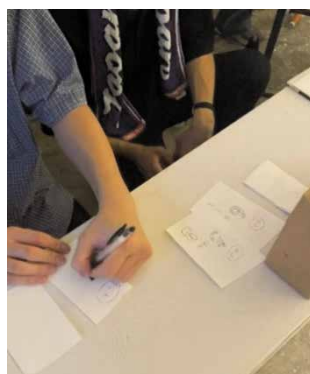
想定以上にキット販売は好評で、順番待ちが発生しはじめた、そこで、急ぎよ整理券をお渡しする対応を取った(〔図表 6-5〕左を参照)。糸巻き器前の 2 つの席が埋まってしまった際に整理券をお渡しし、席が空くまでの間は他の展示や出店を見てもらってから再度お越しいただける体制にして、お客様に無駄な時間が生じないように配慮した。

上述のとおり私たちは二日間のために 30 セット用意していたが、早々に売り切れになってしまいそうだった。二日目には余っていた糸繰りの木枠も活用して何とか 1 セット追加で用意したが、それも含めて早い段階で計 31 個を完売して売り切れになった。売り切れの表示を受付に出し、ゼミの Instagram アカウントでもその連絡を投稿したほどだった(〔図表 6-5〕右を参照)。

このように、キット販売は予想以上の成功だった。合計 1 万 5,500 円の収入も得られた。昨年度よりも値段を下げた効果が大きかったと思われる。加えて、白昼堂堂でのインスタレーション展示のもとでの販売だった点も成功要因である。白昼堂堂ではトチオノアカリのランプが多く展示されていたことから、多くの方が糸繰り枠ランプの現物に触れて、ランプに興味を強く持っていただけた。その会場内でお持ち帰りいただけるランプキットを

販売したことで、キットに対する来場者の興味をひくのに成功したのではないかと思います。

〔図表 6-4〕 大盛況のキット販売（2023/9/17） 〔図表 6-5〕 急ぎよ整理券を用意(左)、
キット完売のお知らせ(右)



改善すべき課題も見えた。一つは人員配置である。今回ゼミ全体でシフト表を作成し、キット販売、白昼堂々、観音寺、ナイトマルシェ（フード）、悠久祭に人員を配置したが、その中でキット販売の要員は不足した。体験コーナーに設置した椅子の数プラス1の人数の対応スタッフが必要だった。二つ目は、会場内での PR 強化である。三つ目として、順番待ちのお客様の待ち時間を減らす工夫が必要である。

今年度の成功をもとにして、さらに以上の課題を改善し、来年度以降もトチオノアカリにてキット販売を行い、トチオノアカリの PR を一層波及させていきたいと考えている。

（執筆担当） 笹川 宗汰

7. スタンプラリーの開催

7.1 スタンプラリーのねらい

トチオノアカリ本イベント活性化事業のもう一つの取り組みは、スタンプラリーの開催である。協議会の西片会長からのご依頼もあって、私たちは昨年度に続き今年度もトチオノアカリ本イベントにあわせてスタンプラリーに取り組んだ。

スタンプラリー開催の基本的な目的は、トチオノアカリ本イベントへの来場者に会場内を巡ってもらうことで、より長い時間エリア内で楽しんでもらうことである。それは滞留人口の増加に直接寄与する。また、参加者の回遊によって、雁木通りの魅力の再発見と発信にもつながりうる。今年のスタンプラリーを担当したのは、昨年度に続いて「広報班」である。4年池浦、金子、高山、3年外山、渡部の5人で取り組み、昨年度の経験も活かして、より多くの人に参加してもらうことを目指した。

7.2 スタンプラリーの開催要領の決定

広報班では、最初にスタンプラリーの基本的な開催要領について相談した。昨年度同様に、トチオノアカリ協議会伝統のスタンプをお借りし、スタンプの数に対応した8カ所のチェックポイントの設置を確認した。設置場所については、イベント時の催し物の関係で1カ所のみ変更する必要があったが、それ以外は基本的に昨年度と同じ場所にした。

続いて、賞品について検討した。私たちは、できるだけ多くの人に参加してもらうための魅力づくりとして、参加者への賞品提供が必要だと考えた。昨年度と同様に、抽選によ

る特別賞品、および参加者全員への参加賞を検討することにした。

まず、特別賞品としては、トチオノアカリ協議会の西片会長と相談して、協議会のトチオノアカリ・オリジナル手ぬぐいを40枚頂いた、それにプラスしてオリジナルTシャツも10枚いただけて、賞品に追加した。また、私たちも何か特別賞品を提供したかった。その点で、昨年度のスタンプラリーでは、私たち自身が開発した糸繰り杵ランプの一部を賞品とした。それを今年も実施しようと考えた。ゼミ全体でも検討した結果、今年度の糸繰り杵ランプの最終版試作品5体のうち1体の特賞とすることにした。

続いて参加賞である。参加者には1個100円程度のお菓子を配布することにした。この点については、前回の苦い経験がある。昨年度も私たちは事前に参加者全員への参加賞をPRし、見込まれる参加者数分のお菓子を用意した。しかし、予想以上の参加者となり、用意していたお菓子が途中でなくなってしまったのである。

この経験から、今年はお菓子が切れないよう多くのお菓子を購入したいと考えた。だが、資金が足りなさそうだった。そこで西片会長と再度相談したところ、トチオノアカリ協議会からスタンプラリー用資金として2万円を提供していただけることになった。それをもとに去年より多くのお菓子を用意することができた。ただし、念のために当日のチラシ配布（後述）でのPRで、先着50名様への提供である旨を表記した。

7.3 スタンプラリー・シートの作成、賞品抽選体制の確認

スタンプ、設置場所、賞品が決定し、スタンプラリー・シートの作成に取り掛かった。去年のシートをもとに一部修正で作成し、手書きタッチのスタンプラリーマップとした。多くの人に参加したいと思ってもらえるように、賞品が目立つように工夫した。特に、抽選によるNEW糸繰り杵ランプ展示品、トチオノアカリ・オリジナル手ぬぐいとTシャツ、参加者へのお菓子のプレゼントを明記した。

抽選での賞品をお渡しする方法も検討した。昨年度は、参加者全員にスタンプラリー・シートに住所・氏名を記入してもらい、スタンプを集めて受付に戻って来られた際に、住所・氏名の記入欄を切り取って預かり、後日私たちが抽選して当選者に賞品を郵送した。

しかし、それには多くの問題があった。まず住所・氏名を記入してもらうのに時間が掛かり、受付に行列ができ参加者をお待たせしてしまう。参加者に個人情報の記入に対する

〔図表 7-2〕作成したスタンプラリー・シート（おもて面）



抵抗感もある。さらに、後日郵送のための手間と費用も無視できなかった。

今年はその場で抽選を行い、当選者に賞品を手渡ししてお持ち帰りいただく方式に切り替えた。そのためのガラポンとハンドベルは栃尾商工会からお借りできた。ただし、特賞の New 系繰り枠ランプだけは白昼堂堂で展示中のため、後日郵送にした。この方式は、ガラポンやハンドベルの音が賑やかさを創出し、参加者の増加に貢献したと思う。

7.4 昨年度実績を大きく超える

イベント当日、スタンプラリーの受付対応は、広報班メンバーで二人一組の交代制とした。スタンプラリー・シートは白昼堂堂前の受付だけではなく、トチオノアカリ協議会の本部テントなど数カ所に置いていただけた。その甲斐あって、イベントのメイン会場である谷内通りでは、多くの人がスタンプラリーの用紙を手になされていた。

受付に来られた参加者には、スタンプラリー用紙をお渡しし、ルールと賞品を説明した。参加者がスタンプラリーを終えて受付に戻ってこられた際には、参加賞のお菓子をお渡しし、抽選でガラポンをまわしていただいた。

9月16日、17日の両日とも、予想以上に多くの参加者が来てくださった。参加者層は小中学生が中心だったが、夜間の開催だったこともあり大人の方の参加も多かった。私たちの予想以上に幅広い年代の方々に参加していただけた。

大勢の方が受付に来られたが、去年のように住所・氏名を記入する手間もなく、比較的にスムーズだった。ただし、初日に参加賞のお菓子が大量に消費されてしまった。チラシに先着 50 名様への提供とは書いたが、参加者が減らないよう全員にお渡ししたいと考え、二日目の開始前に追加でお菓子を購入した。賞品のトチオノアカリ T シャツも初日に想定以上の当選者が出てしまい不足しそうだったが、協議会から追加で 7 枚提供いただけた。

〔図表 7-3〕 イベント当日のスタンプラリー受付の様子 (2023/9/16)



大きなトラブルもなく二日間のスタンプラリーは終わった。去年のように接客が間に合わずお客様を長い列でお待たせすることもほとんどなく、参加賞のお菓子不足で買い出しに走り参加者をお待たせすることもなかった。昨年度の課題を改善できたと思う。最終的に、二日間の参加者数合計は 545 人となった。去年の実績 226 人の倍近い成果である。

(執筆担当) 池浦 颯士郎

8. 広報への取り組み

8.1 広報班による今年度の活動

以上のとおり、私たち石川ゼミは今年度も栃尾地区の活性化のために様々な事業を展開した。それらの取り組み効果を最大限にするには広報活動が重要だった。「広報班」の5名は、他の班と連携してゼミ全体の広報活動に取り組んだ。

今年度の主なPR関連の創作活動は、計7枚のパネルと2枚のパネル兼チラシの制作である。今年度は石川ゼミのお二人のアドバイザーが非常に多忙になられ、パネル、チラシの制作で直接ご支援をいただくことが難しかったため、我々のみの手作りで進めた。当初は制作方法の基本がわからず困り果てたが、情報収集と試行錯誤をする中で、ポスター・チラシづくりのサポート・アプリ「デザインAC」を見つけ、WordとPowerPointも併用して、各創作物の制作に取り組むことができた。

8.2 大垣市で展示するトチオノアカリのPRパネルの作成

石川ゼミでは8月5日の岐阜県大垣市の「万灯流し」においてトチオノアカリをPRすることになり、その一環でゼミ生代表が大垣市に出張してパネル展示をすることが決定された。私たちは、そのパネルの制作から取り掛かった。

その掲載内容の検討には時間が掛かった。岐阜県の人々には、「栃尾」も「長岡大学」もわからないため、私たちが新潟県から来たこと、トチオノアカリが新潟県長岡市のイベントであることなどを伝えねばならない。それを意識してパネルをデザインした。明るめの配色を基調としたフォントを用いて、ゼミ活動の詳細とトチオノアカリの概要を記載することにした。また、フォロワー数を少しでも増やしたいと考え、ゼミのInstagramアカウントのQRコードとともに長岡大学の写真を掲載した（〔図表 8-1〕参照）。

〔図表 8-1〕大垣市での展示用に作成したパネル

水都祭り・万灯流しに新潟県から参加!!
長岡大学(新潟県長岡市)
石川ゼミナールが万灯流しに参加しています

✓ パネルの展示 (貴船神社の前)
✓ **トチオノアカリ版の万灯の販売**
……貴船神社前のテントにて

※ **トチオノアカリ版の万灯:**
「トチオノアカリ」とは、新潟県長岡市栃尾地区の灯りのイベントです。繊維のまち栃尾を象徴する糸織りの木枠と糸で作られたLEDランプにより、まちを優しくライトアップします。そのランプ(簡易版)を水門川に流します。
新潟県栃尾地区と大垣市の万灯流しとの灯りのコラボレーションです。

※ **長岡大学(新潟県長岡市御山町 80-8)の石川ゼミナール:**
中山間地域である栃尾地区の活性化に向け、地域ブランディングを目標に活動しています。大垣市の万灯流しへの参加を通じて、話題づくりと地域外でのPRが目標に挑戦します。

私たちの活動の伝える Instagram です。
ぜひフォローをお願いします!



TOCHIO_MORIAGETAI



長岡大学
NAGAOKA UNIVERSITY

とちお
新潟県長岡市栃尾地区
の灯りのイベント

トチオノアカリ

万灯流しと灯りイベントのコラボレーションの
ために、新潟県からやって参りました



トチオノアカリは、新潟県長岡市の中山間地域「**栃尾地区**」のライトアップイベントです(今年は9/17・18開催)。
栃尾繊維業の糸織り木枠と栃尾産の糸で作ったランプが、繊維のまち栃尾を優しく照らします。

詳細は**栃尾観光協会の公式ウェブサイト**をご覧ください



デザインが完成した後は、大学のパソコンとプリンターをお借りして印刷した。A1 サイズで制作したかったが、そのサイズで印刷できるプリンターがないため、A3 サイズの四分割で印刷し、それらを液体糊で貼りあわせた。しかし、完成品を見ると糊が乾いて皺になり、見栄えが良くない。メンディングテープやテープ糊で作成し直したところ、改善されて皺なしに完成できた。

〔図表 8-2〕最終版試作品の紹介、万灯流し PR、ゼミ活動 PR の各パネル



8.3 トチオノアカリ本イベントで展示するパネル作成

次の課題は、9月16・17日のトチオノアカリ本イベントで白昼堂堂に展示するパネルの作成だった。そこで広報すべきポイントは、①私たちが開発した糸繰り枠ランプ最終版試作品の紹介、②「万灯流し」のPR、③ゼミ活動のPR、の三つだった（〔図表 8-2〕参照）。

どれも、大垣市で展示したパネル同様にレイアウト、デザインに苦心した。伝えるべき内容・メッセージがしっかりと伝わるように、かつ簡潔に見やすいものにしたいと考えた。特に、栃尾では「万灯流し」については知らない人がほとんどだと思われ、解説はポイントだけにとどめ、イメージが伝わるよう心掛けた。ランプ試作品紹介のパネルでは、スマートフォンで試作品の写真を撮り、それを加工して貼り付けた。紹介する文章は、昨年度の商品開発関連のゼミ資料をもとにして追加情報を加えて修正し完成させた。

8.4 チラシの作成と配布

トチオノアカリ本イベントでは、当日会場でチラシを配布することを決定していた。メイン会場の谷内通り、ナイトマルシェ、ギャラリー白昼堂堂における、石川ゼミの全取り組みのPRチラシである（〔図表 8-3〕参照）。

この制作には、ゼミ内各班との情報共有が重要だった。フード班（ナイトマルシェでの焼きそばとフランクフルトの販売）、イベント班（白昼堂堂と観音寺での展示）、地域連携推進班（白昼堂堂での万灯流し紹介）、資金班（キット販売）、それぞれのPR内容を把握するためである。作成枚数は500枚として、印刷はラクスルに発注した。

〔図表 8-3〕 当日配布用に制作したチラシの表・裏（A 5 サイズ）



完成したチラシは、イベント当日、ゼミ全体のシフト表に従って、私たち広報班でスタンプラリーの受付をしていない時間帯の担当者が谷内通りで配布することになった。トチオノアカリ協議会の本部テントにも置いて頂けた。

このチラシはかなりの成果を挙げた。本イベント初日にまだ序盤であるにもかかわらず、協議会のスタッフの方が白昼堂堂に来られて、チラシが足りなくなったので追加が欲しいと声を掛けて下さった。500 枚のチラシが有効に活用できて、それだけ多くの来場者の手に渡った成果でもある。チラシでの広報は来年度にも取り組みたいと思う。

（執筆担当）渡部 碧惟

8.5 Instagram 利用の活性化に向けて

昨年度に引き続き、私たちは Instagram 活用を継続した（〔図表 8-4〕 参照）。Instagram はイベント案内など様々な情報発信で強力な広報手段になりえる。とはいえ、ある程度のフォロワー数がないとあまり意味がない。フォロワー数獲得で重要なのは、魅力ある内容の発信で投稿を絶やさないことである。

その点で、石川ゼミでは一昨年度から「クリティカル・マス」の視点から『フォロワー 500 人』を目標に掲げ、更新頻度の向上を優先して進めようとして取り組んできた。しかし、残念ながら昨年度末時点でフォロワー数は 300 足らずで未達成のままだった。今年度こそゼミ全員で目標達成したいと考え、広報班主導で新たな投稿ローテーションを設定した。

昨年度以前もローテーションを組んで組織的な投稿体制にはしたが、あまり機能しなかったという反省がある。今回は改善を目指し投稿者の決め方を変更した。昨年度までのように個人ベースではなく、広報班を除いた班で週単位のローテーションを組む方式だ。実際に誰が投稿担当になるかは、各班の中で相談して決めてもらい、お互いに任せあって投稿が漏れないように、毎週の授業内で班内での調整の徹底をお願いした。広報班は土・日の投稿を担当し、他の班には平日の投稿担当を割り振った。

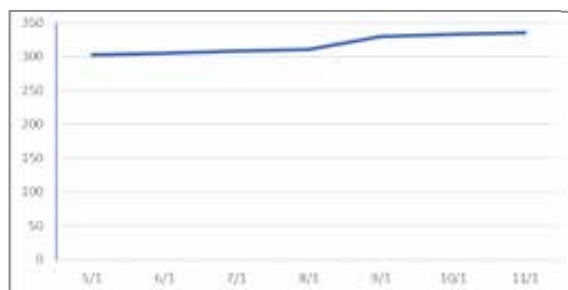
投稿内容としては、魅力的な栃尾の写真を投稿し閲覧者に「こんなところへ行ってみよう」という気持ちになってもらえることが望ましいが、日々のゼミ活動の写真・動画、栃

尾関連の写真等であれば何でも可とした。どうしても投稿内容が見つからない場合には、昨年度同様に、ゼミの Google Drive に共有した 2020 年度のゼミ主催フォトコンテストの写真を使い投稿できる仕組みも整えた。

〔図表 8-4〕ゼミ Instagram の画面



〔図表 8-5〕今年度のフォロワー数推移



こうして Instagram アカウントそのものの魅力向上に励む一方で、ゼミのイベントなどの取り組みの広報に向けた投稿も進めた。9 月のトチオノアカリ本イベントにおけるインスタレーション、フード販売、スタンプラリーの宣伝、昨年度までは無かった 8 月の大垣市における万灯流しの活動 PR の投稿などである。

以上の取り組みにもかかわらず、最終的にフォロワー数は目標値の 500 に遠く及ばなかった（2023/12 月時点で 339。〔図表 8-5〕参照）。その点で、Instagram でのゼミ活動の PR が成果を上げたとは言えない。主担当の広報班でも投稿を忘れてしまうということがあるなど、ゼミ生のローテーションがあまり機能せず更新頻度が上がらなかったのが主な要因である。ゼミの授業時間に Instagram の投稿担当に確認をもう少し徹底すべきだったと感じた。

しかし、決定された投稿のローテーションはまだ継続されている。広報班では春休みも含めて投稿漏れがないように管理して、次年度につないでいきたい。来年度こそフォロワー数 500 を達成し、ゼミ活動 PR のための SNS ネットワークを確立したい。

（執筆担当）高山 愛羅士

8.6 ウェブサイトによる広報

次は、ゼミのウェブサイトの整備プロジェクトである。一昨年度以来、石川ゼミでは SNS だけではなくウェブサイトも使ってメディアの融合による PR 活動为目标に取り組んできた。一昨年度に有料版 WIX で最低限の内容を構築していったん公開したものの、昨年度に仕切り直して制作を進め、公開には至らず頓挫したという経緯がある。今年度はそれまで制作途中だったウェブサイトをしっかり完成させ、公開することが広報班の目標となった。

私たちは、これまでの作業中のウェブを土台にしながらも、栃尾の綺麗な景色をア

ピールすることと、閲覧者にインパクトを与えることを意識して、TOP ページに大きな写真を配置した。その写真は2秒程度で自動的に他の写真に切り替わり、全部で6枚からなる仕様にした。

〔図表 8-6〕制作中のゼミのウェブサイトから



TOP 画面上部に配置したメニューでは、「ホーム」「栃尾はどんなところ」「栃尾のイベント情報」「フォトギャラリー」「栃尾のおすすめスポット」「お問い合わせ」の6コーナーに飛べるように設計した。

「栃尾ってどんなところ」のページでは栃尾の歴史や名産などを簡単に紹介し、「イベント情報」では栃尾のイベント情報をまとめて各イベントの詳細へのリンクを張った。「フォトギャラリー」のページでは、一昨年度のゼミ活動で開催した栃尾地区フォトコンテストの応募作品を中心に掲載し、「お問い合わせ」のページでは閲覧者からサイト運営者にメッセージを送ることができるよう設定した。

現在「栃尾のおすすめスポット」のページが制作途上で、その完成でサイトが公開できる。今年度の授業終了には間に合わなかったが、今年度中には公開予定である。来年度は、これを土台として更に見やすさの改善とコンテンツの充実を図り、最終的には栃尾のバーチャルツアーの枠組みも提供できるように発展させたい。

(執筆担当) 外山 泰生

9 活動資金の調達と管理

9.1 資金班によるゼミ全体の資金の調達・管理の取り組み

今年度のゼミ活動は、当初から、県外の大垣市との連携という新規事業の構想が立ち上がり、昨年度までの実績を大きく超える事業規模になることが予想された。それに伴い活動資金をいかに調達するか、さらに活動資金の効率的な活用など資金管理をいかに適切に実現するかは、ゼミ全体にとってこれまで以上に重要な課題となった。その業務を担当したのは4年阿部、月橋、3年桜井、笹川の4人からなる資金班である。

9.2 資金調達～補助金獲得は失敗、自己資金の獲得へ

最初に取り組んだのは外部資金の調達のための活動である。昨年度は新潟県から教育支援関連の助成を受けることができた。本年度も同様に公的な補助金獲得を目指した。まず補助金関連の情報収集を進めたが、昨年度助成を受けた新潟県の補助金は本年度公募されないことがわかった。

5月に入り、私たちは長岡市の「未来を創る市民活動応援補助金」への申請を決め申請書類を作成し、長岡市市民協働課に相談した。ご担当者は私たちの取り組みに賛同して下さったが、最終的には大学の授業であるゼミ活動への補助は難しいとのことのお話だった。それでも市としてサポートができればとご配慮いただき、ながおか・若者・しごと機構のご担当者を紹介して下さった。同機構のご担当者は様々検討して下さったが、最終的にこちらも同様の理由で難しいとの結論になった。その後、他の補助制度についても情報を集めたが適切なものが見つからず、結局、今年度の公的補助金の申請は失敗に終わった。

私たちは他の資金獲得方法を検討した。第一弾として、昨年度に支援金をいただいた栃尾ライオンズクラブ様に相談できないかと考え、そのメンバーでもあるトチノアカリ協議会の西片会長にお話を伺った。そうして西片会長がご尽力下さった結果、6月7日のライオンズクラブ例会で石川ゼミへの支援金の検討を議題に挙げて下さることになった。

さらに、6月22日にとちおコミュニティーセンターの武士俣センター長にご相談した。武士俣様は資金集めに関して、栃尾商工会を通して栃尾ロータリークラブ様にも依頼が可能だろうとのアドバイスを下さった。私たちは6月27日に栃尾商工会に伺い、事務局長の若林様に今年度のゼミの事業計画や資金計画をご説明して相談をした。若林様は、栃尾ロータリークラブ様の例会で私たちが協賛のお願いができるように調整して下さいました。

9.3 多くの方々からのご支援

西片様、武士俣様、若林様のご尽力で、私たちは6月7日に栃尾ライオンズクラブ様、7月11日に栃尾ロータリークラブ様、それぞれの例会に参加させて頂くことができた。

〔図表 9-1〕 栃尾ロータリークラブ例会での協賛金依頼（2023/7/11）



各例会の冒頭でミニ・スピーチの時間を頂き、今年度のゼミの事業計画、資金計画、今後の展望について解説するとともに、協賛のお願いをさせて頂いた。活動内容がわかりやすく伝わるよう資料を作成して配布し、さらに活動への熱意をお伝えできるよう心掛けた（〔図表 9-1〕〔図表 9-2〕参照）。

〔図表 9-2〕 栃尾ロータリークラブ様への協賛金依頼の資料（抜粋）

2023年7月11日

〈別紙〉 栃尾地域活性化に向けた 2023 年度活動
長岡大学 石川ゼミナール

1. 今年度の事業の柱

①岐阜県大垣市の地域団体と連携して、話題づくりと相乗効果により栃尾地区のPR活動を強化します。

- ・8月5日、6日に大垣市で開催される「水都まつり」に参加し、トチノアカリランプの展示などを行い、栃尾地域のPRを行います。
- ・「水都まつり」では、「水門川万灯流し」という万灯を川に流しライトアップする伝統的なイベントがあり、同じくライト・アップのイベントであるトチノアカリとの「灯りイベントの協働」による話題作りなどの相乗効果が期待されます。
- ・さらに、9月16日、17日の「トチノアカリ」では、「水門川万灯流し」のスタッフの方々を招待した共同イベント（堀本通りギャラリーや神社での展示イベントなど）を開催し、栃尾地区での賑わい創出効果の拡大を図ります。
- ・大垣市青年の集い協議会、トチノアカリ協議会等の諸団体にご協力いただける予定で、すでに詳細の調整を進めております。

②トチノアカリ系縄り棒ランプの市販化に向けて、量産のためのプロトタイプを完成させます。

- ・昨年度、製作したトチノアカリランプの市販化の試作品を土台に、今年度は量産化する最終のプロトタイプを完成させます。昨年度に続き、長岡技術科学大学院生山内陸さんに技術面で頂きます。
- ・来年度以降、量産化の協力企業を募り市販を目指します。それにより、私たちの活動資金面での自立を図ります。

③トチノアカリ・イベントで、地域教育機関との連携した展示を行い、来場者増加に貢献します。

- ・9月16日・17日のトチノアカリ・イベントにおいて、系縄り棒ランプ完成品のお披露目とともに栃尾地区内の幼・保・小・中学校と連携して、園児・児童・生徒の皆さんが制作したライト・キャンドル（500個程度）と保護者からのメッセージパネル（500枚程度）を展示するイベントも実施します。
- ・私たちが制作する系縄り棒ランプの完成品と栃尾地区の子供たち、保護者による光の協奏による、トチノアカリのイベントの集客力を向上させます。

その結果、栃尾ライオンズクラブ様から5万円、栃尾ロータリークラブ様から2万円の協賛金をいただくことができた。

さらに、トチオノアカリ本イベントで、ギャラリー白昼堂堂のご来場者に募金のお願いをすることにした。ギャラリーの入り口付近に募金箱を設置し、今後の活動に応援いただきたい旨のメッセージパネルを置き募金をお願いした。イベント中、白昼堂堂での展示に大勢の来場者があり、募金をして下さる方は多かった。結果として、二日間で計1万7,059円という前年実績を超える募金をお預かりできた。そのご期待にお応えできるように、今後も栃尾地域活性化のための活動に貢献していきたいと改めて強く感じた。

上述のとおり、トチオノアカリ協議会からも白昼堂堂と観音寺での展示イベントのサポートとして、計4万円の協賛金をいただけた。これらの支援をして下さった多くの方々への感謝の気持ちを忘れずに、栃尾地区活性化に貢献したいと思った。

来年度以降の活動資金の調達では、ランプの商品化・販売事業による収益獲得も目標になる。できる限り外部資金に頼らず経済面で自立した活動の実現を目指していきたい。

(執筆担当) 櫻井 大和

9.4 資金管理の工夫

今年度は補助金によらず限られた資金での活動であり、貴重な資金であることを認識して、これまで以上に規律ある資金活用が必要だった。私たち資金班は「資金管理マニュアル」を作成して、ゼミで共有した。ゼミ生全員が共通した資金のルールを理解しモノやサービスを購入することで、正確に資金を管理するためである。

特に今年度は栃尾地域を越えて岐阜県大垣市にも足を運ぶなど大きな資金の動きが予測された。今年度の活動を無事黒字で終了できるよう、徹底した管理を行った。領収書と現金の管理は学生ではなくゼミ教員にお願いし、マニュアルでは以下の内容を定めた。

- ✓ モノやサービスの購入時に必ず領収書を受け取る。
- ✓ 受け取った領収書はスマホで写真を撮り、すぐにゼミのグループ LINE のアルバムに入れる。領収書の現物はゼミ教員に渡す。
- ✓ 立て替え払いをした場合は、領収書と引き換えに教員から現金を受け取る。

こうした今年度の資金管理ルールにおける最大の工夫は、領収書の写真をグループ LINE によりゼミ全体で共有した点である。昨年度はこうした管理がなく、ゼミ生全員での日々の支出の共有が不十分だった。グループ LINE のアルバムによる管理で、常に各班の活動が全メンバーに見えるように意図した。ゼミ全体での活動の意識が高まるとともに、資金状況の情報共有により節約意識が高められると考えたのである。また、私たち資金班にとっても出金記録のデータ化で管理がしやすく、作業の効率化が図れる改善策になった。

(執筆担当) 月橋 唯奈

9.5 支出削減を目指して

今年度のゼミの活動資金は、補助金断念後に頂いた協賛金だけでは不十分だった。そこで、支出をできる限り削減するため、研究室にあるゼミ関連資材の在庫整理を行った。研

究室にある備品は、昨年度までに購入したものがしっかり整理されていなかった。まず、今後使用できるものと使用できないものに分別した。

〔図表 9-3〕 在庫管理の作業 (2023/7/11) 〔図表 9-4〕 作成した在庫表の一部抜粋



フード	まな板 (小)	2個
フード	ガスコンロ	1台
フード	キャップディスペンサー	3つ
展示	結束バンド	20本
展示	釘	大量
展示	安全ピン	約20個
展示	延長コード	大量
商品開発	はんだごて	1本
商品開発	はんだ	1本
商品開発	グルーガンスティック	250本
商品開発	USB・TYPE-C	1個
広報	ミニイーゼル	9個
キット	ボタン電池 (LR44)	13個
キット	LEDキャンドルライト	4個
キット	ラッピングバック (キット)	10枚
イベント	カウンター	1個
イベント	エコのりばね	1個

その後種類別に段ボールに収納し、段ボールの外側に付箋を貼り、中身が一目で分かるよう記載した。フードやイベントなど個々のプロジェクトで使用するものは、それぞれをなるべく同じ段ボールに収納した。同時進行で Excel ファイルに備品と在庫数量を入力した在庫リストを作成し、ゼミ全体に共有した。研究室の在庫をできる限り活用するように、また在庫の有無を確認してから購入するよう呼びかけた。

9.6 資金繰り表作成による財務状況の把握

さらに、昨年度のフード事業が赤字の結果に終わった反省から、ゼミ全体の節約意識向上のため、「資金繰り表」を作成して、ゼミで共有した。収入と支出の見通しについて可能な限り正確な数値を目指した。他の4班に頻繁に聞き取りを行い、それをもとに月別に必要な費用を概算した。それらの金額をもとに月次と累計の双方で資金過不足を示した。想定していた補助金収入がゼロになったり、各事業の予算が徐々に具体化されたりするなど、状況が変わる度に絶えず資金繰り表をアップデートした。また、LINE アルバムで共有された領収書やイベントの売り上げなどの収入は Excel の別シートで収支表として管理した。

年度当初の時点では、資金繰り表によると最終的な収支見通しが3万4千円の赤字となっていた。そのため、一層の支出削減に向けて研究室の在庫整理を行った。その後、栃尾ライオンズクラブ様、栃尾ロータリークラブ様の協賛金、トチオノアカリ協議会様からの支援金、大垣市での万灯流しでの万灯販売等による収入で、トチオノアカリ本イベント前の時点で、資金繰り表による年度末収支の見通しはマイナス1万7千円まで改善された。

それでも依然として赤字の見通しだったことから、本イベント直前に資金繰り表をゼミ全体で共有し、イベントではフード販売に力を入れる必要があるという意識を全体で高めようと考えた。結果として、フード班の努力により、トチオノアカリと悠久祭の合計で16万500円の売り上げを獲得した。材料費やレンタル費などフード関連の支出は計11万380円であったため、5万120円の利益獲得を達成した。これは事前の資金繰り表で想定していた金額の倍以上であり、最終的な収支見通しを大幅な黒字に改善できた。

今年度、最終的にはゼミ全体で総額 30 万円超の事業規模になった。資金繰り表を始めとする資金管理の工夫で、財務状況を絶えず共有でき、ゼミ全体で資金面の危機意識が高められたと思う。その結果、全員の協力により今年度の活動を黒字で終了できた。

〔図表 9-5〕今年度のゼミ活動の収支取りまとめ

収入		支出	
フード売上	160,500	フード事業関連費用（食材、機材レンタル、光熱費等）	110,380
トチオノカリ協議会他からの事業資金提供	80,000	大垣市との地域連携事業関連費用（交通費等）	62,276
栃尾ライオンズクラブ様からの協賛金	50,000	謝金	60,000
栃尾ロータリークラブ様からの協賛金	20,000	イベント会場設営関連費用（テグス、釘、木材等）	58,466
イベント来場者、栃尾地区の皆様からの募金	17,059	ランプ開発・製作関連費用（電子部品等）	19,678
簡易糸繰棒ランプ・キット販売売上	15,500	スタンプラリー関連費用（参加賞購入費、賞品郵送費等）	17,262
大垣市でのトチオノアカリ万灯販売売上	6,000	合計	328,062
合計	349,059	収入－支出	
		単位：円	20,997

9.7 資金面での振り返り、来年度に向けた課題

今年度は大垣市との連携が決まり、これまで以上に多くの資金が必要になった。昨年度同様に補助金申請を試みたが、ゼミナール活動への補助は難しいと 2 つの公的組織から断られた。今年度申請を試みた 2 つの補助制度について過去採択された事業の資料を細かくみると、旅費交通費や長岡市域外の活動には助成されないことが多いように感じられる。また、4 月や 5 月など早い時期に申請が締め切られる補助金もある。難しいかもしれないが、早い段階で年間の事業内容を確定し、申請資料作成に動くと思う。

また、補助金や協賛金への頼りすぎは良くない。前年度に獲得した資金を活用できるように運営するなど、徐々に自立して活動を行えるような体制作りが理想である。

さらに、フードなどの販売事業での資金管理には注意が必要である。9 月のイベント前に、キット販売とフード販売用の釣銭（1000 円札 15 枚、500 円玉 50 枚、100 円玉 200 枚）を手配したが、その釣銭と販売で受け取った現金の金額とがしっかりと管理されず、フードの売上点数計算に手間取った。来年度以降は、最終的に残った金額から用意したつり銭の金額を差し引きできるよう、釣銭とゼミナール活動資金を別にしておく必要がある。

（執筆担当）阿部 里奈

10. 成果発表に向けて

10.1 エンドロール作成

石川ゼミナールの成果発表では、一昨年度から発表の最後にエンドロールを組み込んできた。エンドロールによって、1 年間の振り返りができると同時に視聴者に対して発表最後に強いインパクトを残すことができる。私たちは、今年度も取り入れたいと考えた。

一昨年度のエンドロールは大竹アドバイザーに編集をお任せし、昨年度はゼミ生が大竹アドバイザーのオフィスにお邪魔して助言を頂きながら作成した。今年度はアドバイザーに頼ることなく、ゼミ生のみで作成を目指した。

動画編集ソフトと音源サイトは指導教員が探してくださり、作成の素材となるゼミ活動の写真や動画の選定は発表担当のゼミ生 5 人で行った。そして、楽曲選定と動画編集作業

を4年阿部、永野の2名で行うことにした。

〔図表 10-1〕 エンドロールの作成
(2023/11/29)



作成作業は、初めて使う動画編集ソフトの使い方を覚えるところから始まった。楽曲や動画の切り取りや、楽曲に合わせた切り替えのタイミング調整など、想像以上に時間を要する作業だった。発表練習との同時進行で作業を進めたこともあって、完成まで計3日を要したが、納得のいくエンドロールが完成できたと思う。

(執筆担当) 永野 蓮

10.2 成果発表会

成果発表会での発表は4年阿部、金子、川崎、小島、永野の5人が担当し、そのうち金子がPC操作の担当となった。今年度はイベントへの取り組みが9月で終了し、昨年度以上の時間を準備に割くことができた。その恩恵を最大限に活用し、パワーアップした発表を行うことを目指し、原稿を暗記し発表に臨みたいと考えた。

私たちは、大垣市青年のつどい協議会の皆さんの声も発表に取り込みたいと考えた。トチオノアカリ本イベント後の10月に、4年高橋が大垣市青年のつどい協議会の皆さんにビデオメッセージをご依頼したところ、翌月に1分程度の動画をお送りいただいた。その動画と前述のエンドロールを含めて、全体を13分に収める必要があった。

発表内容の制作には、まず班ごとに分担し原稿とパワーポイントを作成した。それを一つにまとめ、初めて発表者で読み合わせたところ、約25分かかってしまった。13分に収めるには、原稿・パワーポイントどちらも修正する必要があった。授業外の空き時間を活用し発表者全員で修正を行ったが、なかなか13分に収まらず、最終的にバージョン15まで修正を積み重ね、何とか成果発表会前日に無事完成できた。

成果発表会当日、リハーサル前に発表担当の5人が集まり、読み合わせで最終確認を行った。それまでの練習では13分に収めることができたのは1回のみだった。不安で一杯だったが、リハーサル、本番では共に無事13分に収めることができた。大垣市からのビデオメッセージ、エンドロール、エンドロールを背景にした「語り」の部分、すべて好評だった。昨年度を超える発表ができたと思う。

(執筆担当) 阿部 里奈

〔図表 10-2〕 成果発表会当日の様子 (2023/12/2)



11. 全体の振り返りと来年度に向けた考察

11.1 今年度の反省点

最後に今年度の全体的な反省点を整理したい。

1つ目は、岐阜県大垣市のコラボ事業において積極性が不十分だった点である。8月5日

の万灯流しで、私たちはトチオノアカリ版万灯の販売を行った。しかし、そこで販促PRの声掛けが弱かった。現地の方々は、トチオノアカリはもちろん栃尾地域について何も知らない。そうしたなか、他の多くの物販テントが並ぶ中でアピールするには、一層の積極性が必要だったと思う。今年度の活動を足がかりとして、来年度以降、ホームから離れたアウェイでの活動が増えるだろう。声掛けはもちろん展示物も工夫して、人々の注目を集めるための努力を積み重ねたい。

2 つ目は、お預かりした展示物の管理である。昨年度は、栃尾地区の小中学生と幼稚園児等が作成したキャンドルライトの管理が行き届かず、最後にお返しする際にどの学校のものか分からなくなり、地域の方々にご迷惑をお掛けしてしまった。今年度はその反省を踏まえて細心の注意を払ったが、それでも準備過程においてある学校からお預かりした展示物が行方不明になりかける事態が生じた。お預かりした瞬間から移動のたびに確認し、記録を付けるなど、一層責任感をもって管理すべきである。

3 つ目は、フード事業における人員配置である。今年度は悠久祭とトチオノアカリ本イベントが同日開催だった。そのため、とりわけフード事業では2つの拠点の人員配置が問題となった。悠久祭担当者の負荷が大きく、後の栃尾でのメンバー合流が予定とずれるなどの問題が生じた。両イベント前の準備やイベント中の作業分担について細かいシフト表を作成していたが、それがかえって混乱に拍車を掛けた。来年度は無理のない配置とともに、班同士の状況の情報共有を積極的に行い、臨機応変の円滑な稼働を目指したい。

4 つ目は、広報の充実である。昨年度に比べ今年度はイベントの広報活動でテレビなどのメディア活用や事前PRができなかった。テレビ取材などの一層活用により、私たちのゼミ活動はもちろん、栃尾のPRや地域活性化プログラムそのもののPRにも貢献できる。来年度は多様なメディアに積極的に働きかけるなど、広報の強化にも取り組みたい。

5 つ目は、よりきめ細やかな記録の実現である。今年度の成果発表会のプレゼン資料を作成する上で、横方向（ランドスケープモード）で撮影された動画が少なく、せっかく記録した成果が最大限に活用できなかった。成果発表会のみには照準を合わせて活動しているわけではないが、発表会で私たちの取り組みを評価してもらうこともとても重要である。今後はゼミ生全員が積極的に様々な形態で写真や動画を残していったほしい。

11.2 来年度に向けて

来年度については、ゼミ全体で議論がまだ十分に行われていないが、主に以下の3つを計画中である。

一つ目は、岐阜県大垣市万灯流しとのコラボ事業の継続である。今年度は初めての県外での協働ということもあり、情報収集や視察に多くの時間を要し効率が悪かった。それでも、8月の万灯流しにトチオノアカリを持って行けたこと、また9月のトチオノアカリ本イベントに大垣市青年のつどい協議会の方々を招待できたことは、今後の協働の発展にむけて大きな実績となった。来年度以降は今年度築いた土台をもとに、両地域の活性化に向けてどのように協働していくかが重要である。また、将来的には行政も巻き込んで姉妹地区

的な動きへの発展も目指していきたい。

二つ目は、糸繰り枠ランプの商品化プロジェクトである。昨年度からの継続事業だが、最終版プロトタイプの完成を受け、ついに量産を目指して動くこととなる。最終版プロトタイプの全体設計図の作成と、協力企業探しが重要なポイントとなるだろう。

その全体設計図については、長岡技術科学大学院の山内さんが12月に来学くださり、商品化に必要な電気知識の講義をしてくださった（〔図表 11-1〕参照）。

内容が専門的なため、事前に山内さんからご指示いただいた課題を予習し講義に臨んだ。3年生を中心に。馴染みのない専門的な知識を理解しようと真剣に講義を受けた。

協力企業探しについては、トチオノアカリ協議会の西片会長からご協力いただけるとのお言葉もいただいた。それにしても、製品の量産化はゼミ生にとって非常に難しいテーマになることは間違いないだろう。これまで築いてきたネットワークを最大限に活かし、外部の方々にご協力いただきながら実現を目指したい。

〔図表 11-1〕長岡技大院生山内さんの特別講義（2023/12/12）～電気回路のご指導



三つ目は、トチオノアカリ本イベントのバージョンアップ事業である。このイベントには2年前から関わらせていただいていたが、今年度は新たなネットワークを活かして、新たな工夫も加えてイベントの盛り上げに貢献できた。来年度以降もさらにイベントを盛り上げていけるよう事業を行っていきたい。

11.3 終わりに

今年度の活動は、新たな取り組みへの挑戦と昨年度までの取り組みのバージョンアップの同時進行であった。新たな取り組みではゼミ生主体で動くことができた場面が多く、今後の新たな挑戦にとって重要な土台・実績になったと感じている。昨年度の取り組みのバージョンアップにおいても、これまでの失敗や反省点をしっかりと活かし、事業拡大に繋げることができた。ゼミナールとして大きな成長機会になったのではないだろうか。

これからも、より多くの人に栃尾地域の魅力を知ってもらうとともに、私たちの活動が中山間地域の活性化の成功例として参照いただけるようになり、さらには地域活性化の取り組みそのものへの注目を高められるよう励んでいきたい。

（執筆担当）永野 蓮

